
サニーサイドアップにブラックペッパー

九曜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

サニーサイドアップにブラックペッパー

【Nコード】

N5679L

【作者名】

九曜

【あらすじ】

梓沢可純は入学したばかりの高校で、美貌の先輩・柚木紗羅と出会った。先輩の気ままな態度に振り回されながらも、紆余曲折の末におともを命じられた可純。果たして、ふたりの高校生活の行方は……？

プロローグ（前書き）

可純と耀子の会話。

その中で可純は、先の体育の時間の出来事を語りはじめる。

プロローグ

ここ、私立翔星館高校は男女共学校だ。
そう標榜している。

しかし、実際のところ男子生徒の数は全体の3割に満たない。というのも、もとは女子高で、そこから共学へと路線変更したのが5年前。それに伴って施設の拡充と制服のデザイン変更、学校名も今のものへと変えたが、それでも思うように男子生徒は増えなかったらしい。

おかげで梓沢可純は、この4月から男友達アスサワ・カスミの少ない高校生活をスタートさせていた。

「耀子さあ」

休み時間、可純は決まって後ろの席の親愛なる友人、村神耀子ムラカミ・ヨウコに話しかける。

「柚木先輩って知ってる？」

「柚木？」

耀子は次の授業の準備をしていた手を止め、投げかけられた問いを疑問形の発音で返した。1年生の中にあつては少し大人っぽい端正な顔を上げ、可純を真っ直ぐ見つめる。その鋭利すぎる視線を受け、可純は少々たじろいでしまった。

「3年の、柚木紗羅？」

確かめるようにして耀子は、ハスキーな声で重ねる。

「うん、そう」

「なに、可純。知ってたの、あの人のこと。噂に疎いのに」

「もちろん知ってるよ」

翔星館高校3年の柚木紗羅ユスキ・シヤラは、いろんな意味で有名人だった。まだ入学してさほど日にちの経っていない可純たち1年生の耳にも、主に類稀なる美少女として、その噂はすぐに入ってきた。

「ていうかさ、噂に疎いって、ボクってそういう認識なの？」

「……………」

しかし、耀子は黙って可純を見つめるだけだった。どこか非難の色を帯びた、何か言いたそうな目つきだ。

「えっとお……………」

そんな責めるような視線から逃げるようにして目を逸らし、可純は鼻の横を搔く。そして、耀子はその可純を見て、ため息ひとつ。

「それで？」

「え？」

「……………続き」

「あ、ああ、そうだった。ボクさ、さっきの体育、見学してたじゃない？ そのときに会ったんだ。柚木先輩と」

そうして可純は、そのときのことを話しはじめた。

今日の2時間目は体育の授業。

しかし、可純はそれを見学していた。可純の肌は日本人にしては色が濃く健康的で、グラウンドを走り回っているほうが似合いそうなのだが、そして、実際、体を動かすことは好きだが、見学の理由には体調不良という便利な言葉を使った。聞くものが聞けば、「ああ、そういうことか」とわかってくれることだろう。

翔星館高校のグラウンドは校舎が建つ場所よりも低くなっていて、階段で結ばれている。可純はその階段の横の緩やかな斜面に、行儀悪くあぐらをかいて授業を見学していた。

「うわー。耀子、やる気ないなあ」

男女平等を掲げた翔星館では、ほとんどの授業を男女が一緒に行う。体育も男女混合でカリキュラムが組まれているし、家庭科もなれば男子生徒だって裁縫も調理実習もやらされる。

そして、本日の体育はサッカー。

授業も終わりにさしかかった今は、試合形式のゲームをやっている。10人に満たない男子は話し合いの末、半々に分かれてそれぞれディフェンダに回ったようだ。こうなると試合の鍵を握るのは女

子なのだが、背も高く運動神経も抜群な耀子はまったくやる気を見せていなかった。チームメイトは頼みの綱の耀子にボールを回すが、彼女はこっちくんなどばかりにすぐにパスを出す。そのパス自体絶妙なのに、きゃーきゃー騒ぐだけの女子ではまったく活かせていなかった。

「耀子はやる気にムラがあるから」

可純は苦笑する。

耀子が活躍しているならまだ見るべきものもあるが、彼女がそんな調子なのでサッカーはすでに女の子の球蹴りにまでレベルを落としてしまっていた。可純は早々に見飽きて、他へと目をやる。

隣では別のクラスがハンドボールをやっていた。可純たちより大人っぽい雰囲気を見るに、おそらく3年生だろう。

その中に群を抜いて上手い女子生徒がいた。長身の耀子よりもさらに背が高く、スレンダーな体つきをしている。ハンドボールの経験者が現役のプレイヤーなのだろうが、所詮は体育の授業と本気は出さず、パスを回してチームメイトを動かし、ゲームメイクに徹していた。長い手を活かした打点の高いパスや、素早く手首をひねってのラテラルパス。立ち位置としては耀子と同じだが、まったくやる気が違っている。

「上手いなあ。ボクの手じゃあんなラテラルパスはまずむりだもの」
可純は手をひねってパスの運動をさせながら、そのプレイに感心した。

「麗を見ているの？」

「ほわ？」

いきなり声をかけられて横を見てみれば、まず目に入ったのはスニーカを履いた細い足首だった。スニーカは足首までを覆うハイカット。バッシュだろうか。そこから視線を上げていくと、すらりとした足に翔星館の制服である明るい赤のチェック柄スカート。背中まである艶やかな蜂蜜色の長い髪と紺のブレザー。

そして、

うわ……

そこに目の覚めるような美少女がいた。

ひと口に美少女と言ってしまったが、彼女は少女でも大人でもなかった。そして、尚且つ、そのふたつが同居していた。そういう少女から大人へと移り変わる一瞬を切り取ったのが彼女なのだろう。

その女子生徒は色素の薄いブラウンの瞳をグラウンドに向けていた。

「あ、あの、レイって……？」

「あなたが見ていた女の子よ。周防麗。わたしのクラスメイトにして親友」

だけど、今や可純の視線はその周防麗スオウ・レイではなく、そうおしえてくれた本人に釘づけになっていた。

可純にはすぐにわかった。実物を見たことがなくとも確信できた。今まさに隣に立っている彼女こそ、あの噂の……

柚木紗羅、先輩……。

美貌の最上級生はスカートのポケットから真っ白いハンカチを取り出すと、それを広げて可純の隣に敷いた。そして、その上に腰を下ろし、そろえた足にスカートを巻き込むようにして両の太ももを腕で抱える。

顔が可純のほうに向けられた。

目が合う。

間近で見た彼女の相貌に、可純は神がかり的な何かを感じ取った。それがいつたいなんなのかはわからない。だけど、そこには言葉にできない、彼女の美しさの根拠となる神秘性が確かにあった。

大粒の瞳に吸い込まれるような錯覚。

「こんにちは。あなた、お名前は？」

「こ、こんにちは……」

音楽的な響きの声にはつと我に返り、思わず顔をそむける。クラスの球蹴りに顔を向けるが、その目は焦点が合わず泳いでしまっていた。

「あ、梓沢可純です。みんなからは“可純くん”って呼ばれてます」
緊張のあまりよけいなことまで言ってしまう。しまった、と思っ
たときはもう遅かった。隣からくすくすと笑い声が聞こえてきて、
恥ずかしさで顔が赤くなった。

「面白い子ね。そう、じゃあ、わたしも可純くんって呼ぶことにす
るわ」

「え？」

「そう呼ばれているのでしょうか？」

「え、ええ、まあ……」

確かにそうではあるし、初対面の人間にそう呼ばれることも少な
くはない。だけど、まさか校内でも有名なあの柚木紗羅にいきなり
こんなふうに親しげにされるとは思わなかった。

「ならかまわないわね。……わたしは」

「柚木先輩、ですよね？」

「あら、知っていたの？ どこかで会ったかしら？」

意外だとばかりに目を丸くする。

「いえ、先輩は有名ですから」

「そう。そういうのも考えものね。自己紹介の手間は省けるけど」
紗羅は面白くなさそうにため息を吐いた。

「……それで可純くんは、見学？」

「いわゆる体調不良というやつで……」

「そう。そういうことね」

どうやら意味するところをわかってくれたらしい。

「そういう先輩も見学ですか？」

クラスメイトが体育をしているのだから、やはり見学なのだろう。
だけど、授業に参加しない見学者であっても体操着に着替えるのが
基本だ。骨折や怪我などで着替えが困難な場合だけ例外になる。と
ころが紗羅は制服のまま。にも拘らず足もとはスニーカーだ。なんと
もちぐはぐな印象を受ける。

「そんなところね」

そして、紗羅の答えもまた曖昧だった。

謎めいた人だと可純は思う。

そもそも彼女は最初からここにいたのだろうか。授業中のこの時間、人目を引く容姿の紗羅でなくともグラウンドに制服でいれば目立つはず。なのに、可純は今の今まで気がつかなかった。急に現れたとは思えない。

遠くでホイッスルが鳴った。

どうやら3年のハンドボールのゲームが終わったようだ。周防麗という名らしい先輩はチームメイトとハイタッチを交わしていた。勝ったのだろうか。

「終わったみたい」

可純の隣で紗羅が立ち上がった。

「それじゃあね」

「あ、はい」

前触れもなく切り出された別れの言葉に、可純はそれだけを返すのがせいっぱいだった。

「また会いましょう」

「え？」

「楽しみにしてるわ」

思わず見上げた可純に、彼女は青空をバックに微笑んだ。

紗羅が離れていく。クラスのところに戻るのかと思いきや、階段を上がり、グラウンドとは正反対のほうへと向かった。校舎の中に入るのだろうか、と彼女の行方を目で追っていると、再びホイッスルの音。今度は可純のクラスの球蹴りが終わったようだ。授業も終わるらしく、見学の可純にも集合がかかった。

結局、紗羅がどこに向かったかわからないままだった。

「……で？」

可純の話を聞き終えた耀子は、テンションの低い、ともすれば不機嫌にも聞こえる発音で問いを返した。

「で……つて？」

「……バカ？」

冷やかな声。

「要するに、体育の見学仲間が少し話をしただけでしょ」

「た、確かにそうかも、と自信なく答える可純くんです……」

耀子は呆れたようにため息を吐いた。

「ちよつと有名人と話したからって舞い上がらないことね」

「……あう。ごもっとも且つ厳しいご意見で……」

現実を突きつけられ、可純は凹む。

でも、

だからと言って、これつきりというわけではないはずだ。そう思える理由は別れ際の「また会いましょう」の言葉などではなく、もつとちゃんとかたちのあるものだ。

可純の机の中には、まさにそれが入っている。

それ。

あのとき紗羅が去った後、その場に残されていた彼女のハンカチが……。

第1章 万有引力の法則 / Scene 01 (前書き)

耀子とともに紗羅のクラスを訪れる可純。
そこで紗羅と会うことができたが……。

第1章 万有引力の法則 / Scene 01

なぜ月は落ちてこないのか？

1 .

私立翔星館高校は、いくつかの高校、大学、専門学校などの教育機関や、研究機関が集積された学園都市の中にある。駅から徒歩圏内に位置しているので、立地条件としてはかなりいいほうだろう。

その翔星館高校の生徒である梓沢可純の登校時間は、平均的な生徒のそれより幾分か早い。入学式を終えた最初の授業の日に他の学校も含めた登校ラッシュに巻き込まれ、自分の小柄な体では無駄な消耗をするだけと悟ったからだ。

駅に着いた電車から吐き出される乗客の数は少ないけれど、そこに混じる制服は様々。可純はその流れの一部となって、改札口へと向かう。

「ん？ あれは……」

と、ひと足先に自動改札を通る利用客の中に、見知った背中とブラウンのツーサイドアップの髪を見つけた。村神耀子だ。

「おっはよう」

可純は改札口を出ると耀子に追いつき、横に並んだ。平均よりも背の低い可純と、逆に高い耀子が並ぶと、頭ひとつ分近くの差がでる。

耀子は可純を一瞥。

「ん。おはよう」

テンションの低い挨拶を返した。

別に起きて間がないからまだ頭の回転数が低いとか、学校へ行くのが憂鬱だというわけではない。これが耀子の平均値なのだ。

可純はちらと彼女を横目で見た。

耀子は切れ長の目の、伶俐な美貌の持ち主だ。制服も慣れた感じ

で着こなしている。憧れの先輩、柚木紗羅がかわいらしくファツシヨナブルに着るのに対し、耀子は悪っぽく着崩している感じだ。いずれ同性から人気が出そうだな、と可純は思う。人を寄せつけない態度と雰囲気少々残念ではあるが。

とは言え、彼女が見た目ほど怖くないことを知っている可純は、かまわず話しかける。

「あのさ、耀子。柚木先輩のことなんだけど
「は？」

見下ろすようにして上から睨まれた。

「……………」

怖かった。

なぜか今日の耀子は怖かった。

「え、えつとお……………」

話しながら可純と耀子は歩を進める。

洒落た外観の駅舎を出ると、すぐ前はバスやタクシーの乗り場のあるロータリイになっている。他にはイベント会場としても使われるタイル張りの駅前広場やショッピングセンター、ファーストフード店などがあり、これら一帯はキャンパスガーデンと名づけられている。

下校時間ともなれば学生で賑わうこの辺りも、ショッピングセンターをはじめ多くの店舗がまだ準備中で、朝の空気と相まって開店前の商店街独特の雰囲気を漂わせていた。

耀子はどんな反応をするだろうか、と内心びくびくしながら可純は切り出した。

「今日、昼休みに柚木先輩のクラスに行ってみようと思う」

「あんなとこ、いったい何しに行くわけ？」

例えるなら、手の施しようのない愚かものを前にしたかの如き呆れ声。

「あんなとこって……………」

あんまりな言い方に可純は一瞬唖然とする。

「もちろん柚木先輩に会いに行くに決まってるじゃない？」

「……可純、この前から口を開いたら柚木先輩柚木先輩ね」

「う……」

心当たりがありすぎて言葉を詰まらせてしまう。

柚木紗羅と言葉を交わしたのが一昨日。確かに、以来、何かと彼女のことを話題にしている気がする。

だって仕方ないじゃない。

遠くから見ているだけだと思っていた美貌の先輩に、あんなふう
に話しかけられたことで急に近く感じられて、しかも、間近で見ると
想像以上に不思議で魅力的な人だったのだから。夢中になるなど
言うほうがむりだ。

キャンパスガーデンの敷地を出て、ちょうど青だった横断歩道を
渡る。

学園都市は景観を重視してデザインされている。歩道も車道も幅
が広くて余裕があり、街路樹などの緑も比較的多い。可純と耀子は
タイル張りの歩道を、翔星館高校へと向かって歩く。

「耀子は柚木先輩を見て何とも思わない？ 憧れるとか」

柚木紗羅は人気が高い。男子生徒から好意を抱かれるのは当然の
こと、そのやわらかい物腰は同性である女子生徒からも評判がいい。
尤もその分、可純からしてみれば高嶺の花に見えるのだが。

対する耀子の返答は簡潔だった。

「別に」

「……だろっね」

予想していた答えだ。

「耀子、他人に興味なさそうなもの」

耀子のクールというには冷めすぎているスタイルは、恋愛は勿論、
同性の先輩に対して憧れを抱いたりするようなタイプには見えな
かった。孤高という言葉がぴったりだ。

「兎に角さ、今日あたり柚木先輩のクラスに行ってみようと思う」

「……あっそ」

「……」

これはダメだ、と可純は密かにため息を吐いた。

耀子についてきてもらおうと考えていたのだけど、この様子ではむりそうだ。

昼休み。

午前の4時間の授業を終え、ほっとひと息つくランチタイム。弁当を持ってこない可純と耀子は、連れ立って学生食堂へと行く。

翔星館高校の学生食堂は教室棟とは別棟になっている。連絡通路で結ばれているため上靴のままで行くことができるが、屋根がいつただけのコンクリートの道は横風の強い雨の日は走り抜けないとずぶ濡れになってしまう。

幸い今日は快晴。ふたりは食堂に着くなり迷うことなく日替わりランチセットのコーナーへと向かった。

可純も食堂を利用しはじめた当初はあれやこれやと毎日メニューを変えていたけれど、2週間も経たずに考えるのが面倒になり、放っておいてもメニューのほうから自発的に変わってくれるこのランチセットへと落ち着いた。

「耀子は一目からこれだったよね」

彼女は最初から思考を放棄していたらしい。

ふたりはトレイの上に本日のメニューを乗せ、空いていたテーブルに向かい合わせに座った。食堂は独立した建物だけあって一般的な私立高校のそれよりも十分に広く、座る場所に困るようなことはまずない。これも学校が共学に変わる際の施設拡充の結果だ。

座った席から階段が見え、可純はそちらを注視した。

途中に踊り場があり、そこで180度向きを変える構造の階段。それがフロアの一角にあった。

「この上ってさ、ラウンジだっけ？」

「らしいわね」

可純とは反対に、耀子は興味のなさそうな声だった。

2階はラウンジの通称で呼ばれている。1階も学生食堂にしてはおしゃれな空間だが、その上はさらに高級感あるデザインになっている。と可純は噂で聞いていた。行ったことがないのだ。

「一度行ってみたくない？」

「行けばいいじゃない」

「恐ろしいことを」

どうやらラウンジには1年生は使ってはいけないという不文律があるらしい。確かに可純は、昼休みであれ放課後であれ、階段を上がっていく1年生の姿はまだ見たことがなかった。

「私は行きたくなったら行くけどな」

「そりゃあ耀子ならね。でも、ボクはそこまで図太くはなれないもの」

きつと耀子ならそんな暗黙の了解などものともせず、その気になりさえすれば涼しい顔で踏み入るのだろう。

「さて、さつさと食べないと。いただきます」

ようやく可純は箸を手を取った。

「この後、何か用でもあるの？」

「朝言ったよ。柚木先輩のところに行くって」

「……ああ、忘れてたわ」

短く投げやりに言っつて、耀子もランチに手をつけた。

呆れられてるなあ。

もとから低いテンションをさらに低くした様子の耀子を見ながら思う。これ以上この話題には触れるべきではないと判断して、可純はひとまず食事を進めることにした。

再度、耀子が口を開いたのは、トレイの上のものを半分ほど片づけたときだった。

「行くのはいいけど、」

「うん？」

可純は顔を上げた。

しかし、耀子のほうはサラダをつつきながら、可純のことは見て

いない。

「相手にされなくても知らないわよ」

「ああ、それなら大丈夫。実はさ」

そう切り出して可純が話したのは、あの日拾ったハンカチのことだった。それは家で洗濯をしてアイロンもかけ、今はポケットに入っている。

「……何それ、聞いてないんだけど」

耀子はゆっくりと可純を見た。

「だって言っただけから」

「言いなさいよ」

そして、むつとする。

言える雰囲気じゃなかったじゃんかよー、と喉まででかかったそれを可純は飲み込んだ。

「ま、いいけどさ。……はい、ごちそうさまでした。じゃ、行ってこようかな」

「私も行くわ」

「え？」

箸を置き、立ち上がろうと腰を浮かした構造で動きを止める可純。何か言いたげに耀子を見る。

「行かないとは言っていないでしょ」

その何かに耀子は先回りした。

「……勝手に行けばみたいいな態度だったくせに」

「……」

「……」

「文句ある？」

「い、いえ、ありません……と耀子の鋭い眼光に身の危険を感じながら言う可純くんです……」

可純は立ち上がり、トレイを手に取った。3年の教室に行く前に、まずは食器返却口である。

ふたりは学生食堂を出て、通常教室棟の廊下を歩く。

「柚木先輩のクラスってどこだろ？」

よくよく考えてみれば、そんな基本的な情報も知らないことに気づく。たぶん彼女の噂を耳にする中で聞いたような気もするが、可純は思い出せなかった。

「7組」

「あ、そうなんだ。耀子、詳しいね」

「……」

黙った。

可純は耀子を見るが、彼女はそれに連動するような運動で顔を背けた。

黙った上に、逃げた。

おかげでその表情は窺えなかったが、心なしか悔しがっているふうに見えないこともない。

「えっと、じゃあ、先輩ってボクらと同じ特進科理系なんだ」

翔星館高校には普通科のほかには有名大学の合格を目指した特別進学コースが、理系と文系それぞれひとクラスずつある。1組から5組までは普通科、6組が特進科文系、7組が特進科理系、以降家政科、音楽科と決まっているので、クラスがわかればどこに所属しているかわかる仕組みになっている。可純と耀子も1年の7組で、特進科理系だ。

思わぬところから情報もたらされ、可純は3年の教室が集まる廊下を、クラスが書かれたプレートを順に見ながら歩いていく。

気のせいかすれ違う先輩の多くが、自分たちを見ながら通り過ぎていくような気がする。こんなところまでくる新入生が珍しいからか、それとも耀子が注目を集めてしまっているのか。

「つと、ここが7組か」

目的のクラスに辿り着く。幸いにして入り口は開けっ放しになっていた。昼休みで生徒の出入りが多いせいだろう。

「耀子、柚木先輩がいるかどうか覗いてみて」

「なんで私が」

「冗談じゃないわ　と耀子。仕方ないので可純は自分で確認することにする。もとより耀子に期待はしていなかった。

半身を隠すようにしながら教室の中を覗き込もうとして　後ろで耀子も同じことをしようとしているのに気づき、ぎょっとした。

「……」

結局、見るんじゃないか。思わず彼女の顔に目をやるが、あえてもう何も言わなかった。改めて耀子とふたり、中を覗き込む。

教室内は、3年のクラスと言えども自分たちのところと特に違いはなかった。広さも同じで、同じ規格の机とイスが並んでいる。生徒の半数くらいはどこかに行っているようで、残っているのは女子生徒ばかり。皆それぞれ仲のよいグループでかたまって、おしゃべりをしているようだ。

そして、

「いない？」

「みたいね」

その中にお目当ての人の姿はなかった。

「ていうかさ、みんなこっち見てない？」

可純は耀子に、確認するように問いかける。

今度は気のせいではなく、明らかに注目を浴びていた。こちらを見ながら何ごとかを囁き合っている先輩もいる。ふたりはドアから離れた。紗羅がいないのなら居心地の悪い思いをしてまでここに立つている必要はない。

可純は考える。新入生が3年生のエリアまでやってきて教室を覗き込んでいれば、不審と好奇の視線を向けられるのも当然だろう。

それ以外に理由があるとすれば……。

「耀子だね」

「可純じゃないの」

「なぜにボク!？」

公平に見れば　耀子は柚木紗羅と肩を並べる容姿だろう。紗羅の

噂がこちらにまで聞こえてきたように、耀子の噂も3年まで届いていても不思議ではない。

と、そこまで考えたときだった。

「あっ」

可純は廊下の向こうから歩いてくる、見覚えのある女子生徒二人組の姿を見つけた。耀子も可純の声に反応して振り返る。

ふたりのうちのひとり、艶やかな長い蜂蜜色の髪を揺らしているのは、まぎれもなく柚木紗羅だ。

彼女は可純に気がつくと、楽しげに話していたその顔からすっと表情を消した。

あれ？ と可純。

何か雰囲気がおかしい。

「お、これはこれは、おふたりさんおそろいで」

先に口を開いたのは紗羅ではなく、もうひとりのほう。赤毛のシヨートカット。前に見たときは半袖の体操着にジャージのボトム姿だったが、今はスレンダーな長身を制服に包んでいた。名前は確か周防麗と聞いている。

「梓沢可純、だよな？」

可純の前にやってきた麗は、間近で見ると思っていた以上に背が高かった。もしかしたら頭ひとつ分くらい違うかもしれない。

「ボクのこと知ってるんですか？」

「もちろん。それに紗羅からも聞いているよ。……ね？」

言葉の最後の部分は、その紗羅に投げかけたものだ。

「え、ええ……」

だけど、紗羅はどことなく歯切れの悪い調子でうなずく。

「……それで、何か用？」

そして、続く声には何の感動も含まれていなかった。無感情な発音。

そこに可純はひどく不吉なものを感じる。

が、ここまでできて引き返すわけにもいかない。不安ばかりを掻き

立てられながら、おそろおそろ切り出した。

「あ、あの、これを……」

ポケットから例のハンカチを差し出す。真っ白なハンカチは、よく見れば同じく白い糸で刺繍が入っていて、そのさり気ない飾りが上品だった。

「……」

紗羅はしばしそれを見つめる。

やがて。

「どこにいったのかと置いていたら、そう、あのときに忘れていったのね」

言って可純の手からそれを受け取った。

「わざわざ届けてくれたのね。ありがとう。……それじゃあ」

「え？」

可純は呆気にとられた。

踵を返す紗羅。

「……」

終わったらしい。

期待していた先輩との2度目の対面は、いとも容易く終わりを迎えた。

別に分不相応な期待をしていたつもりはないし、お礼を言われたかったわけでもない。ただ、また話せたらと思っていただけ。あのときは突然のことですら話ができなかったから。今度はもう少しうまく、できれば少しだけ長く話せたら、と。他愛もない話でよかった。

それなのに。

可純の憧れた先輩の声は終始淡々としていて、その姿はすぐに教室の中へと消えてしまった。

「あ、ちよ、ちよつと紗羅！ その態度はないでしょーがっ」

誰よりも真っ先に文句を言ったのは、彼女の親友であるという麗だった。

「えっと……悪いね。紗羅にはアタシからちゃんと言っとくから」
そう可純に謝ってから、彼女も紗羅を追って教室へと入っていった。

廊下に取り残されたのは、可純と耀子。

「なにあれ、腹が立つわね」

紗羅の登場以降、むっとして押し黙っていた耀子がやっと言葉を発した。また一段とむっとしている。

「可純がせつかく」

「耀子」

と、可純が発音をかぶせた。

「……もういいよ」

怒り冷めやらぬ様子の彼女を制する。

というか、耀子はこうなってほしそうな感じだったじゃんか。とは言え、さすがにこれはショックだった。耀子を宥める声にも力がない。

「帰ろうか。とりあえず目的は果たしたんだしね」

可純は柚木紗羅の教室に背を向けた。

憧れの先輩との唯一の接点だったハンカチは、もう手の中になかった。

” / Scene 02 (前書き)

可純はピアノの音に誘われ音楽室へ行き、そこで相坂恭一郎と出会う。

2.

朝早くに学校へ行くと、かすかにピアノの音が聞こえてくる。

通常教室棟から中庭をはさんだ特別教室棟の3階の一角に音楽科の生徒のためのレッスン室があるが、そちらや大音楽室は防音がつかりしている。おそらく音源は少々防音の甘い小音楽室だろう。

その日、梓沢可純がそこに行ってみようと思ったのは、ほんの気まぐれであり、また先日の柚木紗羅との一件を引きずっていた、その気分転換でもあった。

可純がいる1年7組の教室は通常教室棟の3階。記憶によれば音楽関係の教室は特別教室棟の、同じく3階のはずだ。移動は平面座標の範囲だけですむ。教室を出ると、廊下には生徒の姿はほとんどなかった。まだ全校生徒の半数も登校していないだろう。可純はすぐ近くの渡り廊下を使って特別教室棟へ渡った。

場所は知らずとも次第にはつきり聞こえてくるピアノの音を頼りに、音楽室に辿り着いた。確かにこの中から聞こえてくる。少し背伸びをして、ドアの上部についた小窓から中を覗いてみた。

「わ……」

思わず小さく感嘆の声がもれる。

中にはグランドピアノがあり、こちらからでも鍵盤を叩く奏者の姿が見えた。そこにいたのは眼鏡をかけた繊細な顔立ちながら、まぎれもなく男子生徒だった。

おそらく3年生で、音楽科の生徒なのだろう。彼は上体を激しく振りながらピアノを弾き続けている。可純にはその方面の知識がないので、曲名はわからない。テンポの速い曲だから、きつと指は目まぐるしく動いているに違いない。

しばらくはその演奏する姿に見惚れ、その音に聞き惚れていたが、だんだんと背伸びの体勢も辛くなってきた。踵を下ろして一旦休憩。

「男の先輩だったんだ。すごいなあ」

何の先入観か、今までずっと弾いているのは女の子だと思っただけで、可純はひたすら感心しきりだった。

ふいにピアノの音がやんだ。

「おや、と思つて再び小窓を覗き込む、が、
あれ？」

先ほどまでピアノの前に座っていた先輩の姿がなくなっていた。どこに行ったのだろうかと教室内のあちらこちらに目を向けてみるが、しかし、小窓からでは見える範囲も限られている。

と。

「わっ」

「わあっ!?!」

いきなり真下からにゅつと出てきた顔に驚き、可純は悲鳴を上げて廊下の反対端まで飛び退いた。

直後、ドアがスライドし、ピアノの先輩が姿を現す。

「はは、すごいな。人間後ろ向きでもけっこう飛ぶもんだな」

人を驚かせておいて勝手な言い草だ。

可純は改めて彼を見た。背が高い。少し長めの髪に、眼鏡のよく似合う線の細い顔立ちをしていた。

神様つて不公平だ。

こっそり心の中で天を仰ぐ。

耀子といい周防麗といいこの先輩といい、皆背が高い。それに比べてボクは……、と思わず劣等感を覚える。

「新入生、名前は？」

「え？ あ、はい、梓沢可純です」

はつと意識を戻し、問われるままに答えた。

「うん？ 梓沢、可純……ああ、なるほどな」

彼は可純をしげしげと眺め、何やらひとり納得する。

「そーゆー先輩は誰なんですか？」

「あれ？ 俺のこと知らない？」

「知りませんよ。ボク、新入生なんですから」
きっぱりと可純。

すると目の前の先輩はがっくりと頂垂れた。

「そうだよなあ。誰もが知ってると思うのが間違いだよなあ」

そして、小さくぶつぶつとひとり言をこぼす。

「って、そうじゃないな。オレは相坂恭一郎。アイサカ・キョウイチロウ音楽科の3年だ」

「相坂……、恭一郎……？」

今度は可純が復唱する。どこかでその名前を聞いた覚えがあった。

「ま、今覚えてくれたらいいさ」

どこで聞いたか思い出そうとうんうんうなっている可純を見て、

相坂はやわらかく笑った。腕を組み、音楽室のドアにもたれる。

「相坂先輩は毎朝ピアノを？」

少し早めに学校にいくと、いつもピアノの音が聞こえている気がする。

「毎朝でもないけどな。だいたいは、だな」

「熱心なんですね。朝早くから」

「ん？ ああ、オレ、寮生だから」

相坂はさらりと答えた。

翔星館高校には遠方に住む学生のための学生寮がある。まだ女子高だった頃は自宅から通えない生徒は必ず寮に入らねばならなかったが、今はそれも自由となっていた。寮以外でひとり暮らしをする生徒も多いようで、可純が知る中では耀子もそうだと聞いている。

「寮って、裏門を出たところでしたっけ？」

「そう。ここから……じゃ見えないか」

相坂が窓の外に目をやったので、可純も振り返ってそちらを見た。確かにここからでは通常教室棟が邪魔になって見ることができなかつた。

「そんなわけで、特に早く出なくてもいいんだ」

「いいなあ」

寮には寮の大変さがあるだろうが、可純は学校の目と鼻の先に住

まいがあることを羨ましく思う。

「だからさ、こんなのでよければいつでも聴きにこいよ。こそこそ覗き見せずに」

「はあい」

それを言われたら素直に返事をするしかなくなる。

「ま、オレも梓沢なら大歓迎だよ」

なにやら調子のいいことを言う相坂に、可純は冷ややかにジト目を向けた。

「先輩つて、寄ってくる女の子はみんな自分に好意をもってるって思ってますん？」

「……うわ。お前、言うことキツいな」

心当たりでもあるのか胸を手で押さえてうめく相坂。

「あ、でも、本当にまたきていいですか？」

「ああ、遠慮なくこいよ」

そう言つて微笑む。そこにはこれまでの悪戯心やユーモアとは違って、上級生らしく大人びた余裕があった。それを見て可純はどきどきとする。

「おっと。だけど今朝はもう店じまいだ」

相坂は腕時計を見てから、ドアにもたれていた背中を離れた。

「オレは片づけと戸締りがあるから。梓沢も遅れないように教室に戻れよ」

あ、はい と、可純。

その返事に相坂は、背中越しに手を振りながら応え、音楽室のドアの向こうに姿を消した。可純も腕時計を見てみる。体に似合わない大きなダイバーズウォッチ。まだ朝のショートホームルームがはじまるまでには余裕があるが、考えてみればいつもこれくらいの時間にはもうピアノの音は聞こえていなかったように思う。

可純は閉じられたドアをしばらく見つめ、またここにこようと思った。

きたときと同じ渡り廊下を通って通常教室棟に戻る。

眼下に広がるのは中庭。通常教室棟と特別教室棟にはさまれたそこは、一面の芝生と不規則に走る小道からなる。よく手入れされた芝生の上にはベンチやテーブルがあり、まるで休日に家族連れが訪れる自然公園のようだ。実際、昼休みや放課後には生徒たちの憩いの場として重宝されている。

「今度、耀子でも誘ってみようかな」

昼休みに食堂で昼食をとった後、飲みものを持って行ってみるのも悪くはなさそうだと、そんなことを考えてながら歩いていたのが悪かったのかもしれない。

渡り廊下から校舎に入り、直交する廊下に差しかけたときだった。

「きゃっ」

「うぎゅ」

その角で出会い頭に人とぶつかってしまった。幸いどちらも普通に歩いていただけなので、大きな衝撃はなかった。

「す、すいま……」

謝ろうとした可純の言葉が途切れる。

やわらかい美貌に、輝く蜂蜜色の長い髪。目の前にいたのは、柚木紗羅だった。

紗羅のほうも驚いたようで、口に掌を当てて固まっている。

可純は予想だにできなかった事態に頭が混乱した。柚木先輩にぶつかっちゃった。謝って、それから何か言ったほうがいい？ でも、この前はまったく相手にされなかったし。だいたいなぜに先輩がこんな一年の教室ばかりのところ？ 一度にいろんな考えがぐるぐる巡る。

混乱する頭を一気にクリアしたのは可純自身でも紗羅でもなく、横から投げかけられた別の人物の声だった。

「お、梓沢。こんなところで道草か」

先ほど別れた相坂恭一郎だ。追いつかれてしまったらしい。

「つと、柚木もいるのか。じゃあな」

さらには紗羅にも声をかける。

そのまま彼は立ち止まるわけでもなく、ふたりの横を抜けていった。たぶん音楽室の鍵を返しにいくのだろう。職員室のある進学棟のほうへ向かう相坂を、可純と紗羅は黙って見送る。

彼の背中が小さくなってから、可純は視線を紗羅へと移した。彼女も可純を見、そして、もう一度相坂に目をやった。その運動が意味するものは、不明。

可純の頭によぎるのは、先日のハンカチを返しに行ったとき的一件だった。

「……」

思い出すと胸が締めつけられるような感覚に襲われ、自分が考えていた以上に傷ついていることを知った。もうあんな思いをするのはごめんだ。だったら、すぐにこの場を後にしよう。

「えつと、じゃあ、ボクも。……すみませんでした。失礼します」
髪を後ろから前へ振り回すような勢いで、深々と頭を下げる。そうして紗羅の前から立ち去ろうとした。

が、

「待って」

呼び止められた。思わず体を跳ねさせ、足を止める。

「あなた、きよ……相坂君と顔見知りだったの？」

「え？ あ、はい」

驚きの混じった問いかけに、おそろおそろ、ゆっくり振り向く。

「と言っても、今さっき知り合っただばかり、ですけど」

そうつけ加えると、紗羅は視線を床の上に落とし、顔を伏せてしまった。

思考。

というよりは、葛藤だろうか。

垂れた前髪に隠れて表情は窺えずとも、わずかに見える口元の噛みしめるような唇や、胸の前で握られた右の拳が、さらにその印象

を強める。

押し黙る紗羅と、どうしていいかわからず戸惑う可純。脇を通り過ぎていく生徒も、何ごとかと怪訝な目を向けていく。可純が登校してきたときよりもずいぶん行き交う生徒の姿が増え、朝特有の喧騒が廊下を満たしつつあった。

やがて顔を上げた彼女は、

「そう。可純くんはかわいいものね」

その美貌に微笑を浮かべていた。

あ、れ……？

可純は思わず呆気にとられる。

この前とは違う反応。最初に戻ったただけと言えばそうなのだが、しかし、それでもきよとんとしてしまう。

そして、そうしながらもひかえめに言い返した。

「じ、実はあまり『かわいい』は嬉しくなかつたり……」

幼く見える容姿は可純のコンプレックスであり、常日頃からもつと大人っぽい言葉で表現されたいと思っていた。

「そうなの？ でも、わたしは褒めているのよ？ 可純くん、すごくかわいいもの」

「あ、あう……」

真正面からそこまで言われると、個人的に嬉しくない言葉でも照れてしまう。

「だから、相坂君が声をかけるのも当然だわ」

「せ、先輩こそ相坂先輩と知り合いませんか？」

可純は耐え切れなくなって、慌てて話題を変えた。

「そうね。でも、新入生は兎も角、うちの女の子なら誰でも知っているんじゃないかしら？ 彼、有名なもの。なにせ『翔星のプリンス様』よ？ 憧れる子は多いわ」

「あ、そうなんだ……」

完全に他人ごとで感心する。

でも、わからない話ではない。繊細なつくりの顔やピアノを弾く

姿は、そう呼ばれるのに相応しいものがある。たぶん彼の名もその手の噂の中で聞いたのだろう。……ただ、プリンス様にしては少々性格にユーモアがあり過ぎるような気もするけれど。

「やっぱり先輩も、ですか？ 憧れるのは」

思わず訊いてしまう。可純としては紗羅に、他の女の子たちのようなそんなミィハーな気持ちは持っていてほしくないと思う。

「さあ、どうかしらね」

だが、彼女は曖昧に笑っただけだった。

と、そこでチャイムが鳴った。朝のホームルームがはじまる時間。今ごろ外では門が閉められていることだろう。

「戻るわ」

「え？ あ、はい」

「じゃあね」

言って紗羅は、挨拶のように可純の頭を撫でながら、髪を前から耳の後ろへ流した。最後には笑顔ひとつ投げかけ、去っていく。

可純は頭に手を当てながらそれを見送り、こぼした。

「顔が熱い……と、それを自覚しながらつぶやく可純くんなのでス

……」

きつと紗羅に触れられたからだろう。

呆然と彼女の去った方を見つめて立ち尽くす。

「って、ボクも戻らないとっ」

だが、すぐにはっと己のおかれている状況を思い出し、勢いよく踵を返した。

教室に戻ると、中が何やら騒がしかった。何か目に見える騒動が起こっているわけでもなく、それでいて普段の朝の喧騒とも別種のもの。クラス全体が高揚しているような感じだ。

可純はいつもと違う雰囲気首を傾げながら自分の席まで戻る。

すぐ後ろの席には迫力美人の友人、村神耀子がいた。浮かれたような空気の漂う教室の中であって、彼女だけはいつも通りに近づくなオーラを放っていた。

近づくなと言われてもそこが自分の席であるし、可純はそれが彼女の初期値であるデフォルトことを知っているので臆することはしない。

「おはよう。何かあったの？」

横向きに座りながら耀子に尋ねる。

「……柚木先パイが通りかかったのよ」

「ああ、なるほど」

納得。それなら新入生にとっては街中で思いがけず見かけた芸能人のようなものだ。去ってもそこには冷めやらぬ熱が残る。

「可純は落ち着いてるわね。てっきり自分も見たかったとか言い出すと思ってたわ」

「あ、ボク、今そこで先輩と会ったから」

「……あっそ」

ふと抱いた疑問も、蓋を開けてみればなんてことはない。耀子はくだらなさそうに短く言葉を返した。

「でも、なんか今度は優しかったなあ」

「何それ。相変わらず気まぐれね」

呆れたような耀子の声。

「だねえ」

可純も同感だった。

そこで担任の浅井瞳先生が教室に入ってきて、可純と耀子の話は途切れた。

” / S c e n e 0 3 (前 書 き)

朝、可純は電車で紗羅と会う。

そして、同じ日、グラウンドで彼女の諦観した考えに触れることになる。

3 .

確かに柚木紗羅は気まぐれだった。

その日の朝、可純は登校途中の電車で彼女と会った。学園都市まで後ふた駅というところで、紗羅が乗り込んできたのだ。

ドアのすぐそばで吊り革を持って立っていた可純は、それが開く前から彼女の姿を認めていた。遅れて彼女も可純に気がつき、わずかに目を見開いてブラウンの瞳に驚きと戸惑いの色を見せた。それが 電車がホームに止まって、ドアが開くまでの、一瞬のやり取り。

そして、ドアが開いた。

と同時に、紗羅の顔からすつと表情が消えた。電車に乗り込み、可純の横をすり抜けていく。まるで可純など見えていないかのよう

にああ……、

可純は落胆した。あ那时的先輩だ。ハンカチを渡しに教室まで行ったときに出会った、自分にまったく関心のない先輩だ。

わからなくなってきた。

体育を見学していたときや廊下でばったり会ったときに笑顔で声をかけてくれた先輩と、今の冷たい先輩。どちらが本当の先輩なのだろう。それになぜこんなにもころころと態度が変わるのか。

わからない。

と、そのとき、可純の視界の端に紗羅の姿が映った。

驚いてそちらを見る。

すぐ隣に紗羅が並んで立っていた。可純と同じように吊り革を持って、だけど、顔は正面を見たまま。そこはドアでも窓でもないよな部分で、あるのは百貨店のバーゲンの広告だけだ。もちろん、本当にそれを読んでいるわけではないのだろう。

可純も顔を前に戻す。

と、

「……おはよう」

「!?!」

びっくりして飛び上がりそうになった。

あると思っていなかった紗羅からの言葉。

「お、おはようございます……」

可純はたどたどしく返す。

でも 交わされた言葉は、ただ、それだけだった。

後に続いたのは拒絶のような沈黙。

「……」

「……」

なんとなくこうなるような気はしていた。でも、紗羅に声をかけてもらった瞬間、どこかで淡い期待を抱いたのも確かで、可純は静かに視線を落とす。

電車が走り出した。

この駅から学園都市までは8分ほど。しかし、可純にとってはその10分に満たない時間がひどく長く感じられた。

周りでは同じ学校の生徒同士、顔見知り同士で楽しくおしゃべりしているのに、可純と紗羅にはそれが無い。ただ単に同じ車両に乗り合わせただけの赤の他人のように、無言で肩を並べている。憧れの先輩がすぐそばにいて、何度か言葉も交わして知らない仲でもないのに。なのに、声もかけられないし、かけてももらえない。その辛さに可純は唇を噛む。

車窓に流れる風景の速さに反して、時間の流れは緩慢だった。

電車が学園都市の駅に着き、ドアが開くと同時にホームに飛び出した。紗羅の近くにいたのが苦しかったからだ。可純はそのまま一度も振り返らず、早足で改札へ続く階段を下りていった。

その日はどうしてもそんな気になれず、体育の授業は見学するこ

とにした。

先生に告げた理由は体調不良。なんと便利な言葉だろう。

可純は今、緩やかな斜面になった芝生の上に座り、見学をしていた。今日も授業はサッカー。クラスメイトたちが二人一組でパスの練習をしているのを、揃えた膝の上に顎を乗せた構造でぼんやりと眺める。

もう何も考えたくなかった。

なぜあの日この場所で紗羅が自分に声をかけてきたのかも。なぜ急に冷たくなるのかも。どうしてあんなにも気まぐれなのかも。

もう紗羅のことは考えないようにしたかった。

それなのに。

隣に誰かが立つ気配。

可純はわずかに息を飲んだ。

ゆっくりと斜め下に目を向けると 見えたのは黒いソックスに、ハイカットのバッシュ。

「……」

顔を正面に戻し、無言を貫いた。

「ごめんなさい。怒ってる？」

降ってきた声は、これまで聞いたことのない申し訳なさそうな響きだった。

「……わかりません」

答える可純の目は前に向けられたまま。

「怒ればいいのか、泣けばいいのか。それともいつそ笑えばいいのか。よくわかりません」

「わたしも、よくわからないの」

紗羅が可純の横に腰を下ろした。初めて会ったときと同じように。でも、今日はハンカチを敷かない。

「可純くんどう接していいか」

「どうして、ですか……？」

可純の問いに、紗羅の口から出た言葉は、

「きつといつかはいなくなるから」

「……」

意図をはかりかねた可純は、無言。

黙る可純に、紗羅は続けた。

「人と人の出会いなんて、言い換えれば別れのはじまりだもの。別れて辛い思いをするくらいなら、最初から出会わなければいいんじゃないかと思うの。それに、わたしは少なくとも来年の春にはここを卒業していなくなる」

その諦観したような考え方に触れて可純は思う。先輩は過去に辛い別れを経験したのだろうか、と。それが彼女を出会いに対して臆病にさせ、ここ数日の行きつ戻りつした態度となって表れたのかもしれない。

「確かにそうかもしれません」

つぶやくように返す。

その気持ちは可純にもわからなくはなかった。

「でも、それでも別れたらそこですべてがなくなるわけじゃなくて、後には必ず何かが残ると思います」

「可純くんは誰かと別れるたびに何かを残してきたの？」

「……」

わずかに逡巡してから、

「人と出会って、そういうことだと思うから」

「強いよね」

「……そうでもないです」

そんなことを思ったことはなかった。ただ、

ただ、ボクは知ってるだけ。

昨日までそばにいた近しい人が、ある日突然いなくなってしまったことだつてがあるということ。そして、あまりにも突然すぎる別れは何も残せないということ。

「じゃあ、もしわたしがいなくなっても、可純くんの中に何かを残してくれる？」

それはまるで哀願のような問い。

「……はい」

それに可純はうなずいた。

「築き上げた分だけ、きつと」

「……」

そこで会話は途切れ、可純と紗羅は黙ってグラウンドを見つめる。ふたりの前方では、可純のクラスの授業が続いていた。今はシュートの練習。主に女子生徒の声と、先生の吹くホイッスルの音が間断なく聞こえてくる。それを瞳に映しながら、可純と紗羅の心はどこか別のところにあった。

どれくらいそうしていただろうか。

「……そう」

やがて紗羅がそう発音した。

「決めたわ」

「え？」

可純は思わず紗羅を見た。もしかしたら彼女の顔を見たのは、この場では今が初めてかもしれない。そして、彼女も可純のほうを見ていて、目が合う。

「わたしも何かを残すことにするわ」

「な、何かって……？」

「何か、よ」

壮絶にアバウトな返事が返ってきた。

ぼかーんとする可純の横で、紗羅が立ち上がる。何ひとつ飾りらしきものをつけていない、長い髪が揺れた。

「何かを、わたしと、」

続けて、上から可純の鼻先に指を突きつける。

「可純くんの中に」

「ぼ、ボク!？」

「ええ」

彼女は自信ありげにうなずいた。

「だから、可純くんはわたしにつき合いなさい」
そして、可純を見下ろし、いつかのように青空を背景にして微笑む。

優しい笑みだった。

そう言えば、と可純は思い至る。

今日で先輩と出会ってちょうど一週間か。先週のこの時間に声をかけられたんだっけ。

そんなことを思って、混乱する頭の整理をひとまず投げ出すのだった。

これが梓沢可純と柚木紗羅のはじまり。

第2章 慣性の法則 / Scene 01 (前書き)

食後のティータイム中の可純と耀子。
そこに紗羅と麗が加わる。

第2章 慣性の法則 / Scene 01

なぜ地球は回り続けるのか？

1 .

4月ももう下旬。

翔星館高校に入学して半月ちよつとが過ぎ、可純は高校生活にもずいぶん慣れてきたものだと感じていた。学生食堂での昼食も、その慣れてきたもののひとつだ。

昼休み、梓沢可純と村神耀子はいつものように日替わりランチを食べ終え、今は食後のティータイムに突入していた。耀子は微糖の缶コーヒー。可純の手の中にあるのはブリックパックのカフェオレだ。

「ボクもさ、高校生活にいろんな希望を持って翔星館に入ったわけ」
ストローの刺さったパックを両手で包むようにしながら、可純はこぼす。

「それがさ なに、この慣れ具合は？ 入学半月にして新生活の新鮮味はどこへやらだ。高校つてこんなもの？ 中学のときとたいして変わらない気がするんだけど」

「単に可純の順応力が高いだけじゃないの？」

耀子はぱつぱつと斬り捨て、缶コーヒーに口をつけた。

実際、彼女の目から見て、可純の環境への適応力は高いと思う。中学までが『地域』なら、高校は『社会』に近い。そんな周りとは他人ばかりの、しかも、男女比の偏った特殊な環境ではじまる新しい生活にも可純は臆さず、すぐに周囲とも打ち解けた。男女問わず仲のよい生徒が多い。耀子には腹の立つ話だが。

しかし、実はその馴染み具合とは裏腹に、可純はよく目立つキャラクタをしているのだが、知らぬは本人ばかりなり、だ。

「耀子だって人のこと言えないくらい慣れ切ってるじゃない」

己が嘆きを一蹴された可純は反撃を試みる。

確かに耀子も尋常ではない。慣れないブレザーの制服に着られている新入生も多い中、彼女は見事な着崩しで着こなしているし、その態度も冷たいほどに落ち着いている。

「ま　私は、ね」

「もう3年生の貫禄だよ」

「……」

耀子は黙り込む。怒ったのではなく、呆れているのだ。でも、まあ、いいわ　と、特に何も言い返さないことにした。

と、そこで食堂内がにわかに騒がしくなった。空気が変わる。

何かわかりやすい騒ぎが起こったわけではなく、囁き声のさざ波のような伝播。それが食堂中に広がったときには、可純と耀子もその理由を理解した。

2階　通称ラウンジへとつながる階段。そこからとある生徒が下りてきたのだ。

この翔星館高校に何人かいる有名生徒の中でも、その筆頭。

柚木紗羅。

その類稀な美貌の最上級生は、艶やかな蜂蜜色の髪を揺らしながら、ラウンジから降りてきた。騒がれることには慣れているのか、自分を話題にした囁き声にも気にしたふうはない。

その後ろには長身の周防麗。彼女はなぜか紗羅の分のトレイまで持っているが、両手がふさがっているにも拘らず、危なげなく階段を下りてくる。身体能力が高い証拠だ。

ふと、先を歩く紗羅の足が止まった。

下から5段目辺り。

高い位置から見下ろすブラウンの瞳も一点に定まり、その先には

「え？　ボク？」

可純がいた。

ただただ見惚れているだけだった可純ははっと我に返り、驚いて

自分の鼻を指さす。紗羅の視線につられて可純を見た徒も多い。

その向こうで紗羅がにこりと笑った。

とんとん、と弾むような軽い足取りで残りの数段を下り、そのまま可純のもとに向かう。

「こんにちは、可純くん」

「こ、こんにちは……」

可純は呆気にとられつつも、挨拶をされたら挨拶を返すという、身についた習慣で言葉を返していた。

「隣、座つてもいい？」

「え？ あ、はい。どうぞ」

「あなたも」

と、紗羅は今度は耀子に顔を向ける。

「一緒させてもらっていいかしら？」

「……どうぞ。ご勝手に」

耀子の返事は短く、素っ気なかった。目も合わそうとしない。向かいでそれを見ていた可純は、上級生に対してそれはないんじゃないかなるかと思うが、今はそれどころではなかった。すぐ横の席に紗羅が腰を下ろしたのだ。

食堂内がまだざわめく。

……え？ どうして柚木さんがあそこに行くわけ？

……あの子とどんな関係？

……私も柚木さんと仲良くなりたいたい。

そんな意味のひそひそ声が断片的に聞こえてくる。上級生であれ新入生であれ、誰もふたりの接点を想像できないのだろう。

思いがけず話題の人となり、居心地の悪い思いをする可純。紗羅のような大物にはとうていなれそうもない。

そこに食器を返却してきた麗が合流する。

「よっ、おふたりさん。今日もおそろいだね」

背の高い彼女は、座った状態からだを見上げるようだ。

またひとり増えやがった、と心の中で密かに悪態をつく耀子。こ

うなるのは当然の流れなのだが、投げやりにコーヒーを煽る。

「じゃ、アタシはこっちに座らせてもらおっか」

「ダメよ。麗は先に飲みものを買ってきて」

耀子の横に座ろうとした麗を、紗羅の声が制した。

「人使いが荒いね、まったく。それで、何をご所望？」

「そうね。今日は可純くんと同じものがいいわね」

彼女は可純の手の中のカフェオレにちらりと目をやってから決めた。「へ？」と、きよとんとする可純。いいのか、こんな甘ったるいもので。

麗は、いつものことなのか「りよーかい」と陽気に答えて、自動販売機コーナーへと歩いていった。

残ったのは可純と耀子と、そして、紗羅。可純は何か盛り上がる話題を振らねばと思うのだが、紗羅がすぐ横にいる緊張でうまく頭がはたらかない。その彼女は、笑顔で可純の顔を眺めるばかり。助けを求めるように耀子を見るが、私は知らん、話したくないオーラを目いっぱい漂わせていた。

そうこうしているうちに、というか、何もできないうちに麗が戻ってきた。

「ほい。買ってきたよ」

「ありがとう」

彼女は買ってきたブリックパックのカフェオレを紗羅に手渡してから、耀子の隣に腰を下ろした。可純の斜め前の位置だ。

「アタシは紗羅に対抗して、耀子と同じもので」

見れば麗は、耀子が飲んでいるのと同じ銘柄の缶コーヒーを持っていた。

「……私は名前で呼んでいいと言った覚えはありませんが」

「気にしないの、そんな小さなこと」

しれつと言って、麗は缶のプルタブを上げた。

どうやら彼女は耀子のことも知っているらしい。可純についても紗羅から聞いていたし、情報収集のためのアンテナの性能はいいよ

うだ。

隣で耀子の機嫌がまたひと目盛り分悪くなった。

「可純くんたちは普段からお昼は食堂なの？」

カフェオレで喉を潤した紗羅が問う。

「あ、はい。先輩たちも、ですか？」

「ええ。この上で、ね」

彼女は真上を指さす。ラウンジだ。

「ボク、入ったことないんですけど、どんなところなんですか？」

「いいところよ。ちよつとしたセレブ気分ね」

紗羅はいたずらっぽく笑った。わざと定義の曖昧な言葉を選んで、明確な説明を避けたのだ。可純はまんまとその意図に引っかかり、いつこうにかたちにならない想像を巡らせては首をひねる。

「ま、気になるんだったら、一度上がつといで」

麗が横から口をはさむ。

「……一年生は入れないはずですが？」

それに応じたのは耀子。

ラウンジに関しては生徒間の不文律がある。一年生のうちは利用不可、入れるのは二年生、三年生だけ　という。

「あつたね、そんなルール」

麗は笑った。

「でも、アンタだったら別にいいんじゃない？」

「私は一年ですので、お間違えなく」

耀子は麗の言葉にかぶせるようにして発音した。

可純も思ったことがあった。耀子なら一年には見えなくらい大人っぽいいし、周りの雑音にも動じない。二重の意味でラウンジに上がれそうだと。

「何を隠そう、こちらのフリーダム姫はそんなルール、入学初日で破ってんのよね」

可純は驚いてフリーダム姫こと柚木紗羅を見た。そんな武勇伝があったとは。

「わたしはいつでも自由よ」

彼女は当然のようにそう言うてのけ、ストローに口をつけた。
麗は続ける。

「で、このラウンジには他にもルールがあるわけよ」

即ち、上級生に招待された場合に限り一年生でも入ってよいという。

「要するに上級生と一緒に入ってもオツケーってことですか？」

「そーゆーことね」

それが伝統的なルールらしい。

「だから今度、わたしが可純くんを招待してあげるわ」

「ボク？」

「ええ」

目をぱちくりさせる可純をに、紗羅はうなずいた。

向かいでは、「じゃ、アタシは耀子を」「……けっこうです」「などと言いつついる。「行きたくなったら勝手にいきますので」。

行くのかよ。二代目フリーダム姫か。

「あれ？ 紗羅が誰かを呼ぶなんて、初めてじゃない？ アタシはクラブで後輩を抱えてるから、ちよくちよく上げてるけど」

「言われてみればそうね」

麗の指摘と、紗羅の納得。

「そう。じゃあ、わたしの初めては可純くんね」

「は、初めて……」

その言葉に何やら意味深長なものを感じて、可純は思わず照れてしまう。

「麗、時間は？」

「ん。気がつけば10分前」

そんな可純の勝手なドキドキをよそに、紗羅と麗は時間を確認する。可純も体に似合わない大きなダイバースウォッチを見てみれば、確かに昼休みはあと10分ほどで終わろうとしていた。浮かれていて時間の感覚がおかしくなっていたようだ。

「戻りましようか。……じゃあね、可純くん」

上級生ふたりが立ち上がる。

「耀子。ボクたちもそろそろ帰ろう」

この辺が潮時だろうか。いつの間にかパツクの中のカフェオレも空になっていた。憧れの先輩がそばにいた緊張と興奮で喉が渇き、知らないうちに飲み干してしまっていたのだろう。

耀子も無言で腰を浮かし、可純の提案に態度で同意を示した。

ところが、そのときだった。

「可純くん、ちょっと」

きなさい と、紗羅に手を引かれた。

されるがままに連行される。少ないながらもまだ食堂に残っていた生徒がなんだなんだと見守る中、つれていかれたのは何本かある柱のすぐそば。近くのテーブルには誰もいなくて、ふたりだけの話をするには丁度いい。

「可純くん、あなた、話し方が硬いわよ」

紗羅は振り返り、可純に向き合う。

先ほどまでのやわらかい表情とは打って変わったの、問い質すような真顔。しかも、やや突き出す感じ。腰に手を当てたポーズはまるで怒っているように見えて、可純はたじろぐ。

「い、いや、だって、その……上級生の人と話をするわけだから、失礼な態度があったらいけないし……」

それに相手はただの上級生ではない。誰あろう美貌の最上級生、柚木紗羅だ。憧れの先輩なのだから、嫌われたくはないし、緊張だつてしてしまう。

「そう。礼儀というものを知っているのね。いい子だわ」

彼女は納得し、寄せていた顔を戻す。

「あ、ありがとうございます」

「でも、」

紗羅は可純の言葉が終わらないうちに発音し、
そして、微笑みかけた。

「わたしにはそんなこと気にしなくていいの。わたしを他の二年生、三年生と一緒にしないで。そんな関係じゃないでしょう?」

「……」

可純は返事に窮する。

「わかった?」

「わ、わかりました……」

いえ、実はわかってません。そんな関係じゃないって、じゃあ、どんな関係なんでしょう?

「はい、よろしい」

しかし、困惑する可純に、紗羅はもう一度満足げに笑みを浮かべた。

それでも 可純にわかることがある。それは紗羅が他の上級生と一緒にするなど言ったのと同じように、彼女もまた自分を他の下級生と一緒にしていないことだ。

” / Scene 02 (前書き)

短い場面。可純がクラスメイトから紗羅との関係を追求される。

2.

「聞きましたよお」

ある日の休み時間、可純の席にふわふわやってきたのは、クラスメイトの入江英理依イリエ・エリイだった。

「へーさん？」

「はい。へーさんです」

英理依は少々間延びした唄うような発音で、嬉しそうに答えた。

彼女には『エリイ』という洒落た愛称があるが、可純は「へーさん」と呼んでいる。というか、呼ばされている。最初にそう呼んでしまったきっかけはちよつとした事故なのだが、英理依はそれがいたく気に入ったようで、以来、可純だけはそれを強制されているのだった。

「なんの話？」

「3年生の柚木さんと仲がいいそうじゃないですか」

英理依は主のいない可純の前の席に、横向きに座った。腰をひねるようになかつこうで、可純と向かい合う。

「仲がいいっていうか……単に先輩がボクの顔を覚えてくれて、よく声をかけてくれるだけ、かな？」

誤魔化すように言う可純だが、実際にもそうだった。

先日の食堂のときほどじっくりとはないが、校内でたびたび声をかけてもらって、二、三の言葉を交わす。そんな風景が可純の学校生活のワンシーンとして確かに追加されている。しかし、いつも決まって憧れの先輩を前にした緊張から、うまく話せないのだが、「あらあら、そうなんですか？ わたしはてつきり“お姉さま”“可純”の仲間なんだと」

「どんな仲だよ……」

うつとりと楽しいな想像を巡らせているふうの英理依に、可純は

呆れてため息混じりに返す。

「わたしとしては耀子さんとの組み合わせも捨てがたいのですが」「なに言ってるの。耀子とはただの友達だよ、決まってるでしょ」「いつも一緒だから、プライベートではもっと親密なのかと思っていました」

英理依は赤くなった頬に両の掌を当てながら言う。いったいどんな想像が彼女を赤面させているのだろう。可純は考えたくなかった。「ま、いつも一緒なのは否定しないけどね」
しかし、今はその耀子も教室にいない。学生食堂で昼食をとった後、寄るところがあると行ってどこかに行ってしまった。

と、そこで遅巻きながら、はたと気づく。

「ていうか、もしかして先輩とボクのことって噂になってる?」

「ひそかに」

どうやら自分で思っていた以上に、先輩と一緒にの場所を見られているようだ。

「……」

少し頭が痛くなってきた。

あまり目立ちたくないものだと思う。

「それで、可純くんは柚木さんと耀子さんのどちらを?」

「もういいって。そーゆー不健全っぽい話は」

力強く身を乗り出してくる英理依を、可純は苦笑しながらあしらった。

” / Scene 03 (前書き)

昼休み、可純は相坂恭一郎を中心とした騒ぎを目撃。
その翌日、久しぶりに音楽室へと足を向ける。

3 .

可純は自分の周りにもうひとり有名人がいたことをすっかり忘れていた。

そのことを思い出したのは、これまた別の日の昼休みのこと。可純が例の如く耀子と他愛もない話をしていたところ、にわかに教室が騒がしくなった。

「ほらほら、見て。あれあれ」

「なにになにつ」

「いるよ、いるいる。あそこ」

皆、誘い誘われるようにして、窓のほうへ寄っていく。

可純はその様子に首を傾げ、耀子を見た。

「なんだろ？」

「見てきたら？」

耀子は教室内の興奮とは逆走するように、冷めた口調。伶俐な美貌によく似合っではいるが。

「それはつまり、見てこいってことだね」

可純は跳ねるように両足をそろえて立ち上がると、他のクラスメイトたちと同じく窓へと寄って外を見てみた。他の教室でも似たり寄つたりの光景が展開されているようだ。

窓の外に見えるのは向かいの特別教室棟だが、眼下にはふたつの校舎にはさまれた中庭が広がっている。よく手入れされた芝生と不規則に走る小道。芝生の上にはテーブルやベンチが置かれていて、天気の良い日には生徒たちの憩いの場所となっている。

そこに皆の注目を集める生徒がいた。

眼鏡をかけた、繊細で整った面立ちの男子生徒。『翔星のプリンス様』とも呼ばれる、音楽科の3年生。

「ああ、相坂先輩かあ」

相坂恭一郎はベンチのひとつに腰かけていた。長い足を組んだ構造が様になっている。その周りにはクラスメイトらしき男女の生徒がいて、談笑しているようだ。

確かにカッコいい、かな？

可純はそれを見て、この騒ぎに納得した。
と、

「相坂先ばーい、こつち向いてくださーい！」
そんな声。

勇気のある女子生徒がいるのは、すぐ隣の教室のようだ。

そして、さすがは『翔星のプリンス様』。相坂はそれに片手を軽く挙げて快く応えた。新入生へのサービスなのだろうか。先の女子生徒は、今度は感激の声を上げた。

そのときだった。

きつと視線を3階にまで上げたからだろう。その拍子に彼は可純のことを見つけたようだ。よく通る声が飛んできた。ピアノだけでなく声楽も得意なのかもしれない。

「よー、梓沢ー」
「げ」

可純の口から思わずそんな声がもれる。

相坂を見に集まったギャラリイの目がこちらに向くのがわかった。それを受けて可純は体を固まらせる。

そして、一拍おいてから、ぎくしゃくとした動きで回れ右。速やかに窓から離れた。

「あ、てめ、梓沢。無視すんなー」

うるさい、バカ。そっちこそこんな人目のあるところで名前を叫ぶんじゃない。可純は心の中で文句を言いつつ、聞こえない振りを決め込んだ。

席へと戻る。

「『翔星のプリンス様』だった」

「そんなところだろうと思ったわ」

耀子の反応はあっさりしたものだ。柚木紗羅と同じく相坂にも興味はないらしい。

「で、そのプリンス様とお知り合いなのか、可純」

そう問うたのは、耀子ではなく別の少女だった。

毛先の波打った灰銀色のショートヘアに、蒼氷の瞳アイズブルーと陶磁器のような白い肌。可純よりも少し背が高いだけの小柄な体には、人を惹きつける不思議な魅力があふれんばかりに満たされていた。

「樹里」

彼女は名を遊佐樹里ユサ・ジュリという。

樹里は可純の隣の席の机に、軽く尻を乗せるようにして立った。

「いつの間にそんなことになってたんだ？」

「さ、さあ、ボクは何も……」

可純は言葉を曖昧にする。ただでさえ柚木紗羅とのものでいろいろ言われているらしいのだ。これ以上話題の種を増やしたくはない。「ふうん」

対して樹里は、可純の言い分など聞いた様子もなく、

「あの柚木先輩にプリンス様。可純も隅に置けないな」

「あ、そ、そうだ、樹里。知ってる？」

案の定そこに触れられ、可純は慌てて話題を変える。

「この学年にさ、元芸能人がいるんだって。ゲーのーじんだよ、ゲーのーじん」

「あ、あー……」

ところが、途端に樹里の発音が宙を彷徨い出した。

それからちよつと呆れたような表情になって、何か言いたげにその蒼氷の瞳を耀子に向ける。アイズブルー

「可純、その辺りぜんぜんだから」

「そうなのか……」

耀子と樹里の、そんなやり取り。

「な、なに？ ボクが何？」

隣で可純が首を傾げる。

「可純が言ってる元芸能人……私だ」

「え？ あ、そうだったんだ……」

へえ、と目を丸くして納得。

「わかるだろ、普通……」

その横で銀髪碧眼白い肌の日本人少女は、がつくりと頂垂れた。

遊佐樹里は、その人を惹きつける魅力あふれる美貌とスタイルのよさを武器に、中学生の頃からモデルをしていた。そのときから同世代にカリスマ的な人気があったが、さらなる飛躍の契機はとある日本人映画監督が彼女に目をつけたことだった。与えられたのは単なる話題作りのための端役で、映画も邦画らしく大コケにコケたものの、劇中で歌手役を務め、主題歌を歌った樹里は世間の注目を浴びることとなった。こうして遊佐樹里はモデルからトップシンガーへと華麗に転身を遂げたのである。

一時は携帯電話や炭酸飲料のCMなどで露出も多かったが、しかし、高校受験を理由にあるとき突如として引退を宣言。芸能界から一瞬にして消え去ってしまった。

「先に言っておくけど、昔のことは話すつもりないから。私にとってはもう終わったことだ」

可純としては稀有な経歴を持つ樹里に聞いてみたいことがあったのだが、きつぱりと釘を刺されてしまった。

「えっと、じゃあ……」

出鼻を挫かれ、違う話題を探す。

「樹里ってハーフなんだっけ？」

「ううん。じゃなくてクォーターだ」

こちらの質問には、彼女はどこか嬉しそうに答えた。

「私の祖父がロシア人なんだ。だから、クォーター」

「へえ」

それにしてもその特徴を色濃く受け継いだものだ、と可純は感心した。

だが、その可純も、実は異国の血が混じっている。祖母がフラン

ス人とカンボジア人のハーフなのだ。しかし、彼女もその子も日本人と結婚しているので、可純に至るまでにかなり薄くなっている。

8分の1がフランス、同じく8分の1がカンボジア、そして、4分の3が日本。クォーターの樹里に比べたら、異国の血はさらに薄い。「あらあら、みんなでなんのお話ですかあ？」

と、そこに現れたのはへーさんこと入江英理依。彼女は背後から樹里に抱きつくようにして顔を覗かせる。

「うわあ、エリイ！ 重いつ」

「重くありませんよお。樹里ちゃんや可純くんと比べたら、少しは重いかもしれませんが」

確かにいつもふわふわしている英理依は軽そうではあった。

その翌日、

可純はいつもより早く教室に入った。

すでに登校していた数人のクラスメイトにおはようを言い、机に鞆を置くと、すぐにまた教室を出た。

生徒の姿のほとんどない廊下を歩き、目指すは特別教室棟の音楽室。先ほどからかすかに聞こえているピアノの音は、そこに近づくとつれて次第に大きくなっていく。その旋律を手繰るようにして音楽室へと辿り着いた。

背伸びをしてドアの上部の小窓から中を覗いてみる。
いた。

相坂恭一郎だ。

彼はグラランドピアノに向かい、優雅に鍵盤を叩いている。曲調もゆったりしたもので、優しい音色を響かせていた。

可純は踵を下ろし、深呼吸をひとつ。そうしてから静かにドアをスライドさせた。

「失礼しまーす……」

練習の邪魔をしては悪いという思いもあって、その発音は非常に小さい。

音楽室の中に入ると、相坂はそれを視界に認めていたのか、可純を見て人懐っこい笑みを浮かべた。それでもピアノを弾く指は止まらない。

どうしようか　と可純は迷う。

小音楽室は、黒板や教壇、ピアノが置かれている前半分が平面になっているのに対し、後ろ半分は後方にいくにつれて高くなる階段状になっている。そこに大学の講義室のような4席ワンセットの机が並べられていた。

今、可純が入ってきたドアも、黒板から離れた場所にある、普通の教室の言うところの“後ろのドア”ではあるが、実際には教室の真ん中に位置していた。

迷った末、可純は最前列の席に腰を下ろした。

相坂のピアノが終わるのを黙って待つ。その方面にはさっぱりなので、可純には彼の腕前のほどはわからないが、その感情を持って語りかけてくるような旋律は人を惹きつけるに十分であることはわかる。

知らず可純は、目を閉じて聞き入っていた。

奏者は相坂。

観客は可純だけ。

まるでたったひとりのためのコンサートのようだ。

そして、ピアノはゆっくりと曲調を変え　いつの間には『猫ふんじゃった』にすり替わっていた。

ゴンッ

思わず額を机に打ちつける可純。

「な、なんで!?!」

「俺の十八番」

曲をコミカルに締めくくって、相坂がいたずらっぽく笑った。

「けっこう真面目に聴いてたのに。……あ、えっと、おはようございます、先輩」

「おう。ようやくきたんだな」

彼は座ったまま体を可純へと向けた。片腕を背もたれに引つ掛け、一転して行儀悪く姿勢を崩す。

「もうこねーのかと思つたよ。昨日なんか無視されたしな」

「そうそう。それですよ」

「うん？」

相坂は「それ」が何を指しているのかわからず、疑問形に発音した。、

「昨日のあれ。あんなに人がいっぱいいるところで名前を呼ばないでくださいよ」

「ああ、あれか。いや、知つた顔があつたからさ、つい、な。悪い悪い」

「もう。どれだけ恥ずかしい思いをしたと思つてるんですか。ボクは先輩と違つて、ごくフツターの生徒なんですから」

口を尖らせて文句を言う可純。

しかし、対する相坂のほうは「何を言ってるんだか」と呆れた思いで、掌を上に向けて肩をすくめる運動を試みせた。

「なんですか、それ」

「別に」

わかんねーならいい と相坂。

「そうだ。だったら、お詫びに何か一曲弾いてやるよ。リクエストはあるか？」

「ふえ？」

きよとんとする可純をよそに、彼は体の向きをピアノへと戻した。手遊びのように、ポーンポーン、と一定の間隔で鍵盤をはじく。澄んだ音色だ。

「え、えつと、じゃあ、『FLY ME TO THE MOON』とか？」

「お、いいな。……ん？ でも、待てよ……」

一度は弾きはじめようとした相坂だったが、しかし、その動きがぴたりと止まる。

「むり……ですか？」

「いや、うまく『猫ふんじやった』にいけるかと思って
「いくなよっ」

可純は何か投げつけてやるうかと思ったが、あいにく手もとに手
ごろなものがなかった。

そのあと、『翔星のプリンス様』は、可純ひとりのために真面目
にリクエスト曲を弾いたのだった。

” / Scene 04 (前書き)

ゴールドデンウィークの計画を話す可純たち。ケータイ番号を交換した後、ふと思う。

柚木先輩も聞いたらおしえてくれるかなあ

” / Scene 04

4 .

ゴールデンウィークも間近に迫った、ある日の昼休み。

皆それぞれに友達同士で食後のひとときを過ごす中、可純もまたいつもの耀子に加えて、樹里、英理依と一緒におしゃべりに興じていた。

「一度くらいみんな遊びに行くべきだと思っんですよお」

ふわふわと間延びした発音でそう提案したのは、へーさんこと入江英理依だった。主が不在の他人の席に腰を下ろしている。

「いいと思うけど、具体的にはどこに？」

それに、白い肌アッシュブロンドに灰銀髪アイスブルーのショートカットと蒼氷の瞳をもつ遊佐樹里が応じる。こちらは机に軽く尻を乗せて立っていた。

「ここは手軽に一ノ宮あたりがよろしいかと」

ブリックパックの豆乳を飲んでいた英理依の口から候補地の名前が挙がる。

一ノ宮は学園都市から最も近い、ターミナル駅を中心にした繁華街だ。若ものの街として人気の場所で、学校帰りに遊びに寄る学生も多い。

「ボクはいいよ」

と参加の意志を表明する可純。しかし、その横では樹里が何やら考え込んでいるふうだった。

「樹里ちゃんはご不満？」

「いや、実は母が一ノ宮で小料理屋をやっていて、一ノ宮じゃ新鮮味がないなって思ったんだ。でも、まあ、それだけのことから、私もかまわない。……耀子は？」

彼女は耀子にパスを投げる。

「なに、私も強制参加なわけ？」

可純と同じく自分の席に座っていた耀子が、立っている樹里を睨

み上げる。

普段から不機嫌そうに話す耀子だが、どうやら今は実際にも機嫌がよろしくないようだ。

虫の居所が悪いのかしらん？

可純は首を傾げる。

「私はただ単に耀子もどろって誘ってるだけ。同じクラスメイトとしてね」

樹里は耀子の視線を真正面から受け止め、そして、同じように真っ直ぐ視線を返した。

「まー、耀子さんが行かなくても、可純くんは連れていきますけどねえ」

「……」

英理依がそう口をはさんだ途端、耀子がかすかに言葉を詰まらせるような様子を見せた。

「えっと、耀子、何か予定があるの？ いや、あるならいいんだけど」

可純も問う。

「……別にないけど」

「じゃあ、行こう」

「……」

「……」

しばし沈黙。

それから、

「わかったわよ。私も行くわよ」

言って、おもむろにため息をひとつ吐いた。

「はぁーい。じゃあ、決まったところでケータイ番号交換」

「それがいいな。可純は持ってるのか？」

「あるよー」

可純はポケットから携帯電話を取り出し、見せる。

「入学するときに、お父さんに持たされた。ボクはいいって言った

んだけど。いつでも連絡が取れるようにしときたいみたい」

「そりゃまた心配性のお父さんだな」

樹里が苦笑する。

が、

「あ、ボク、今ひとり暮らしだから」

瞬間、樹里と英理依がぎょつとした。ただ、耀子だけは表情を変えない。

可純は手早く説明した。

地質学者である可純の父の転勤が決まったのはこの春、急な話だった。新しく設立した研究所への唐突な配属は、所長からの直々の指名だったらしい。そのときにはすでに可純が翔星館への入学を決めていて、父も2、3年で戻れると約束されたこともあって、可純だけをおいていくという苦渋の決断となったのだった。

「そんなわけで、お父さんとお母さん、妹は遠くへ行ってしまい、家にはボクひとりというわけ」

ああ、ダメ猫もいるけどね 最後につけ加える。

「うーん、可純ひとりをおいていくのもどうかと思うな。なんだか可純の扱いが」

「樹里」

樹里の言葉に耀子が発音をかぶせる。彼女の予想外に鋭い声に、樹里は目を丸くした。

「いや、別にそういう意味で言ったんじゃないんだ。悪い、可純」
「あ、うん、大丈夫。ボクも気にするようなことを言われたと思っ
てないから」

可純は耀子を見る。彼女はむっとした表情で、そっぽを向いてしまっていた。自分は悪いことをしていないと言いつつ拗ねているよ
うな、そんな印象を受ける。

「でも、可純くんが一緒に引っ越してたら、今ここにいないわけ
すから」

「うん、確かにそうだ」

英理依の言葉に樹里が笑って応えた。

さっそく番号の交換会がはじまる。

すでに可純と耀子、樹里と英理依は互いにおしえ合っているので、残りの組み合わせが埋められた。

可純はふたり分のアドレスが増えた自分の携帯電話を見つめながら、あることを考えていた。

「可純、どうかした？」

「え？ あ、うん。なんでもない」

耀子に誤魔化すように返事をするが、すぐにまたその考えへと舞い戻る。

柚木先輩に聞いたからおしえてくれるかなあ。

午後の休み時間も可純は、そのことを考え、ぼんやりと廊下を歩いていた。

携帯電話のメモリーに柚木先輩のアドレスが入っていたらいいと思う。

いつでも声が聞けたら素敵だと思う。

思うのだが、

何か、こう、聞く理由があればいいんだけどな。

果たして、おしえてくださいと言っておしえてくれるものだろうか。それ以前に、あの柚木紗羅にそんなことを言っていていいものか。

だからこそ、そこへもっていくための口実が欲しい。

「でも、ないんだよね、理由」

これこれこういう事情で知っておいたほうがいいので、先輩のアドレスおしえてください。そうやってかこつけられそうな理由は、どこを探しても見つからなかった。

「もうこうなったら直球勝負？」

と、そうのときだった。

「うっぶ」

「おっと」

体の前面に軽い衝撃。

ついでに、鼻の辺りはわりかし強打。

考えごとをしながら歩いていたせいで、人にぶつかってしまったらしい。

ただし、弾性衝突ではなく、非弾性衝突。可純の体はぶつかった相手に受け止められていた。

「す、すみません……あ」

慌てて謝りながら顔を上げると、頭ひとつ分以上高い位置にあったのは見知った顔だった、眼鏡の似合う繊細なつくりの相貌。

「相坂先輩？」

「よう」

相坂 相坂恭一郎は目を丸くする可純に向かって、人懐っこい笑みを見せた。

「って」

と、そこではつと我に返り、可純はほとんど相坂を両手で突き飛ばした。

「なんで抱きしめてるんですか！？ いやらしいっ」

「んだよ、お前。だったら弾き飛ばしたほうがよかったのかよ」

彼としては前方確認を怠ったまま歩いてくる可純を受け止めただけなのだが、えらい言われようである。しかも、当の本人から。

「まあ。いいけどな。ちゃんと前見て歩けよ。危ないぞ。考えごともしてたのか？」

「えっと、まあ……」

「なんか悩みか？」

「……」

悩みと言えるかどうかは悩ましいところ。目下のところ、最大の課題であることは確かだが。

「俺が相談にのってやるよとは、さすがに言えねーけどな。でも、梓沢さえよけりゃ、話くらいは聞けず？ 内容によっちゃあ何かできるかもしれないしな」

軽い口調ながら力になってくれようとしているらしい。

「可純はその相坂をじっと見つめる。頭にはちよつとした思いつき。どうした？」

訝しむ相坂。

「先輩、ケータイ番号おしえてください」

「は？」

彼の口から間の抜けた音がもれた。目を瞬かせる。

「もしかしてお前の悩みって、それか？」

「いえ、そうじゃないですけど……」

そう。これは単なる予行演習だ。

もしくは、実験。

「ふうん」

相坂は面白いものでも見つけたかのようにうなずいた。

「いいぜ」

「え？ いいんですか？」

意外にあっさり首が縦に振られたことに、可純は驚く。

「誰にでもってわけじゃないんだけどな。でも、梓沢だったらぜん

ぜんオツケー」

「あ、やっぱり訊いたらおしえてくれるってわけじゃないんだ……」

可純にとって重要なのは前半部分だ。やはり相手は選ぶらしい。

きつと柚木先輩も同じなんだろうなあ、と思う。

結論は出た。

「それじゃあ、失礼します」

「おう……って、ちよつと待て。ケータイのアドレスはどうするんだよ」

「え？ ……ああ」

言われて思い出す。

「えつと、試しに聞いてみただけなんだけどな。ほんとに知りたかったわけじゃないし？」

「ぬおっ！？ ムカついた。ムカついたし、傷ついた」

そして、ちよつと泣きそうだ。

「梓沢。お前、ケータイ出せ」

「え？ いや、でも……」

「こうなつたら意地でも交換だ。俺のアドレス、お前のメモリーに突っ込まないと気がすまねー。……出せ」

そこまで言われて可純は、よこせとばかりに差し出された相坂の掌の上に、自分の携帯電話を乗せた。

彼は右手に可純の端末を、左手に自分の端末を持ち、それらを交互に見ながら同時に操作していく。右も左も同じ器用さで扱えるのは、やはりピアノを得意としているからだろうか。

相坂は最後に端末同士を突き合わせるようにして、データのやり取りをさせた。

「少しくらい喜べよ。俺のアドレス知りたいやつ、けっこういるんだからな」

「ふうん。そんなもんですか」

可純はさらに一件アドレスの増えた携帯電話を不思議そうに眺める。ピンとこない。でも、確かに言われてみたら『翔星のプリンス様』のアドレスだ。そうなのかもしれない。実際、今も遠巻きに羨ましそうに見ている女子生徒が何人かいる。

「あ、もしかしたら売れたりします？」

「売れるかもしれないねーけど売んなバカ」

怒られた。

放課後。

可純は柚木紗羅の教室に行ってみることにした。

いつも一緒に下校している耀子には、寄るところがあるからと、先に帰ってもらった。ただ、聡い彼女はだいたいところを察しつつ黙っているようだったが。

終礼が終わり、3年の先輩たちがそれぞれに昇降口に向かう中、その流れに逆らうようにして可純は3年7組の教室を目指す。

目的の教室を視界に認め 減速。

どうしようかと迷う。

中を覗いて紗羅がいるかどうか確かめなくてはならない。まずそこからしてハードルが高い。前にも一度同じことをしているが、あのときはまだ目的があった。

そう。

今日はまだ迷っている。「ボクにケータイ番号をおしえてください」。そのひと言を言うだけの度胸が、未だに持てないでいた。

と、そのとき、教室から知った顔が出てきた。

「あら、可純じゃない」

「あ、すおー先輩」

スレンダーな長身に赤毛のショートカットは、周防麗だった。

彼女も今から下校らしい。しかし、そばに紗羅の姿はない。ただ、なぜか手に使い込まれた制靴がふたつ握られていた。

「何か用？」

ふたつある靴の理由を尋ねるよりも先に、麗に問われた。

「紗羅？」

「ええ、そうなんですけど……」

しかし、呼んでもらったところで、目的を果たせるかどうか

「あー、だったら、今はあの子……」

ところが、麗の口調が歯切れの悪いものになる。

「 と思ったけど、帰ってきたわ」

「 え？」

麗の視線が可純の背後、廊下の彼方に移り、可純もそれにつられて振り返る。

その先に柚木紗羅の姿があった。

遠目にもそうとわかる類稀なる美少女は、蜂蜜色の長い髪を揺らしながら、人の流れに逆らいつつも堂々と歩いていた。すれ違う何人かの生徒とは、いくつか言葉を交わしているようだ。

遅れて紗羅も可純を見つけ、笑顔を浮かべた。

速足に変わる。

そこからは声をかけられても返さない。真っ直ぐに可純のもとへ。

「こんにちは、可純くん」

「こ、こんにちは」

可純はただどしく挨拶を返す。

憧れの先輩を前にした緊張もあるが、それ以上に心が決まらないまま会ってしまったことに、追いつめられたような気持ちになってしまっていた。

「おかえり。今から迎えにいこうと思ってたところよ。……はい、

鞆

「そう。ありがとう」

麗がふたつもっていた鞆のうちのひとつを手渡す。

「それで、可純くんは何の用ののかしら？」

紗羅が再び可純に向き直った。今日はどんな話題を持ってきたのだろうと、期待しているような表情だ。

「それは……」

焦る。

落ち着けと自分に言い聞かせる。相坂相手に予行演習はすませている。あのときはすんなりと言えた。同じようにすればいい。どんな返事が返ってくるかわからないけど、後は野となれ山となれだ。

そして、結局、

「ご、ごめんなさい。なんでもないですっ。失礼しますっ」

勢いよく頭を下げ、踵を返した。脱兎の如く、その場を去ろうとする。

が、

「待ちなさい」

一步と踏み出すことなく手首を掴まれてしまった。可純の動きが止まる。

続けて肩を掴まれ、くるりと向きを変えられた。

向かい合う可純と紗羅。

「何か用があつたんじゃないの？」

「そう、ですけど……」

「じゃあ、言いなさい」

彼女の表情は意外に厳しいものだった。言葉を飲み込んだ可純の気持ちなど斟酌するつもりはないらしい。わりと一方的だ。

可純は、言わないと帰してくれそうもない、と覚悟を決めた。

「先輩、あの……」

「なあに？」

紗羅の表情がまた期待へと変わる。

「できれば先輩のケータイ番号をおしえてほしいなって……」

可純はおそろおそろ言葉を紡ぎ出した。

取りつく島もなく断られたらどうしよう。

なぜと問われたらどう答えよう。

不安が渦巻く。

だが、紗羅の反応はそういう類のものではなく、かと言って、可純を喜ばせるものでもなかった。

紗羅が見せたのは戸惑いの表情だった。

彼女はそれからおもむろに、救いを求めるように麗を見た。

親友は一度肩をすくめてから、

「自分で考えなさいな。アタシの役目は口出しすることじゃなくて、アンタを見ることなんだから」

求められたものに応じる気はないらしい。

「そう、ね」

紗羅はため息をひとつ。そして、可純へ顔を戻す。

「ええ、いいわ」

「ほんとですか!？」

「可純くんならいいと思えるの」

彼女はさっそく携帯電話を取り出す。

「はい」

「え？」

それは可純の掌の上に乗せられた。

「どうすればいいかわからないの。可純くんがやってくれる？」

「は、はい。じゃあ……」

少々唾然としつつも、先ほど相坂がやったようにふたつの端末をそれぞれの手に持ち、操作していく。幸い紗羅のものは可純と同じキヤリアで、手間取ることはなかった。

端末同士を突き合わせて、データをやり取りさせる。

いちおうこれで作業は完了だが、問題なくできているか心配だ。

可純は紗羅の端末のメモリーを確認してみることにした。

アスサワ・カスミ
梓沢可純。

自分の名前は最初に出てきたア行にちゃんとおさまっていた。安心する。

ただ、

そこにはその名前しかなかった。ア行に可純だけ。

「……」

何か妙なものを感じ、キイを押してアドレス帳を力行へと移す。

そこにはただのひとつも名前がなかった。

サ行。

スオウ・レイ
周防麗。

親友の名前があったが、それだけ。

タ行、ナ行、ハ行……。

次々とページを移していく。

結局、見つかった名前は可純と麗のものだけ。つまり、可純が登

録される前は麗だけだったということになる。

「……」

携帯電話を持ちはじめた一ヶ月に満たない可純だが、それでもさすがにこれは異常だろうとわかる。

「できた？」

言い知れぬ不安を感じている可純の心中などおかまいなく、紗羅は音楽的な響きの声で問うてくる。

「あ、はい。どうぞ」

「ふうん。これに可純くんの番号が入っているのね」

可純が慌てて端末を折りたたんで返すと、紗羅は珍しいものでも見るかのように、それをいろんな角度から眺めはじめた。

思わず可純は麗を見た。

彼女は可純が何を見たかわかっているのだろう。だが、それでも可純に向かって曖昧に微笑むだけだった。

「そう。こういうのも悪くない気がするわ」

一方の紗羅はそんなことを言っていた。

目当てだった先輩のアドレスを手に入れた可純だが、何か見てはいけないものを見てしまった気がして、胸中はどうにも複雑にならざるを得なかった。

夜。

可純は自分の部屋の勉強机で、充電スタンドに立てた携帯電話を睨んでいた。

先輩に電話してみようかと思う。

せっかくおしえてもらったから、かけてみました。もつといろいろ話したかったから。

口実ならいくらでもあるし、どうにでもなる。

端末のキイをいくつか押せば先輩の声が聞けるのだと思うと、それだけで鼓動が早くなるのが自分でもわかった。

が、

そんなドキドキの合間に、ずっと入り込んでくるものがある。

先輩のアドレス帳……

紗羅の携帯電話を操作したときに見た、あの白紙に近いアドレス帳。あれはいつたい何なのだろうか。

ふと、可純は思い出す。

出会ったばかり頃に紗羅が言っていた言葉。

『人と人の出会いなんて、言い換えれば別れのはじまりだもの。別

れて辛い思いをするくらいなら、最初から出会わなければいいんじゃないかと思うの』

ならば、あのアドレス帳はその結果なのだろうか。

別れを怖れて出会いを求めず、人との間に何も残さない　　紗羅
のそんな生き方の一端を垣間見た気がした。

思う。

先輩にとって、ボクって何なんだろう……？

と。

結局、気がつけば夜も遅い時間になり、電話をかけてみることはできなかった。

” / Scene 05 (前書き)

可純のもとに紗羅からの初メール。そこにはただ一文だけが……。そして、放課後、可純は特別教室棟へと足を向ける。

5 .

学園都市駅が朝のピークを迎える少し前。

到着した電車から吐き出される学生の数は少ないが、その制服は色とりどりだ。

「ふぁーあ……」

その中で小さな欠伸を掌で隠しながら電車を降りたのは、日本人にしては濃い色の肌が特徴的な、梓沢可純だ。

可純は人の流れに乗って改札口へ。いつもは軽い足取りで、元氣よく跳ねるように歩くのだが、今朝はやや精彩を欠いていた。

「可純」

改札を出て少し歩いたところで名前を呼ばれる。

振り返れば、速足で近づいてきたのは、

「ああ、耀子。おはよ……」

「おはよう」

村神耀子はいつものようにブレザーの制服を悪っぽく着崩し、制靴を肩に引っ掛けるようにして持っていた。背が高くてスタイルもよく、クール。これほどに“イケてる”女子高生を可純は他に知らない。

「ていうか、可純、どうしたの。ひどい顔してるわよ」

「ん？ そろっ？」

対する今の自分は、その正反対らしい。

「ちよつと寝不足気味」

「髪、ちゃんとブラシ通したの？」

「いちおーは。……そんなにひどい？」

可純は思わず黒髪の頭に手をやった。

「パンク一歩手前」

「んげ」

そこで耀子はくすりと笑う。

「教室に着いたらやってあげるわ」

「うう、お手数おかけします……と、申し訳なさでいっばいの可純くんなのでス……」

「それで」

と、耀子。

「何やってたのよ？」

「んー？」

昨日、

可純は柚木紗羅から携帯電話の番号をおしえてもらった。

類稀な美少女として校内でも有名であり、憧れる生徒も多い最上級生。そんな彼女のアドレスをおしえてもらい、さっそくかけてみようと思った。電話越しの他愛もない会話で夜を過ごしたいと思った。

でも、できなかった。

携帯電話を手に取りうとするたびに頭にちらつくのは、彼女の白紙に近いメモリー。親友の名前しかなかったアドレス帳。

あれはきつと生き方なのだろう。

出会いは別れのはじまり　そう考える彼女は、出会った人との間に何も残してこなかった。何かを築き上げれば、その分だけ別れが辛くなるから。

そうやって人と深く関わることを忌避するようになった理由は何なのだろう。

離別？　死別？　それとも、失恋？

そんなことを考えているうちに、気がつけば電話をかけられるような時間ではなくなっていて、昨夜はもう寝ることにした。だが、ベッドに入った後も考えは巡り続け、まったく寝られなかった。結局、思考に睡魔が勝ったのは明け方。ろくに眠れないまま起床時間を迎えたのだった。

それが寝不足とひどい顔の理由。

しかし、人に言える類のものでもない。特に紗羅の携帯電話の辺りなどは。

「ちよつと、ね」

「そう。まあ、むりには聞かないけど」

誤魔化す可純に、耀子はそれ以上は追及してこなかった。

彼女の必要以上に踏み込んでこないこの距離感は、素直にありがたいと思う。ただ単に無関心なだけかもしれないが。

可純は空を見上げた。

まだ4月だから五月晴れとは言わないのだろうが、頭上には爽やかな春の青空が広がっていた。

この分だとゴールデンウィークもいい天気が続くかな？

その日の授業中、

机の横に吊るした制靴の奥底で、可純の携帯電話が唸り声を上げた。マナーモードのバイブレーション機能。

すぐ近くの席の何人かがそれを聞いてこちらを見たが、特に気にした様子はなかった。

いちおう学校にいる間は電源を切っておくという決まりがあるが、真面目に守っている生徒はほとんどいない。授業中に盛大に着信音を鳴らしたり、運悪く振動音を聞かれたりすれば当然怒られるが、たいていはマナーモードに切り替えるだけですませる。

可純は先生がこちらを見ていない隙を狙って靴から端末を取り出すと、机の下に隠すようにしてそれを開いた。

着信はメール。

差出人は、

「っ！？」

柚木紗羅だった。

昨日、番号を交換して以降、初めてのやり取りだ。

可純は一度顔を上げて、先生を見た。板書中。こちらには気づいていない。やや緊張しながら初メールを開く。

『いい天気ね』

と、あった。

本文はただそれだけ。

「……」

ゆっくり首を傾げる。なんだろう、これは。シンプルすぎて意味が見出せない。

だが、すぐにその下の画像ファイルに気がつく。

画像は写真だった、風景写真。きつと紗羅の携帯電話で撮ったものだろう。上半分は先ほどの本文が示す通りの青空。下半分は住宅地の街並みだった。

どこから撮った写真だろう？

今度は純粹に疑問に対して首を傾げる。

たぶん学校の中で撮ったものだろうとは思う。可純の教室は3階だが、この写真と重なる風景は見たことがなかった。

だとしたら……。

可純は窓の外に目をやる。中庭をはさんだ向かいには特別教室棟があった。

放課後になって可純は、特別教室棟に足を向けた。

耀子には今日もまた先に帰ってもらった。2日連続で悪いと思う。放課後の特別教室棟は、休み時間や昼休みより生徒の数が多く見られた。合唱部や家庭科部、化学部など、特別教室を部室にしている文化部がいくつもあるからだ。2、3人のグループがちらほら歩いている。

ここへきたのは可純が、あの写真が自分とはあまり縁のないこの特別教室棟で撮られたものではないかと推測したからだ。

「高さに2階っぽい？」

ひとまず渡り廊下を渡ってから、階段でひとつ下りる。

2階の中央には図書室があった。放課後は開放されているらしく、開けっばなしのドアからは終礼終了から間もないにも拘わらず、閲

覽席で勉強や読書をしている生徒の姿が見えた。

「ここだろうか。」

奥の窓から見える景色は、写真のものに似ているような気がする。と、可純がなかなか判断できないでいると。

「あら、やっときてくれたのね。」

「っ!？」

いきなり後ろから声をかけられて、飛び上がりそうになった。

振り返らなくてもわかる。ここ最近ですっかり聞き慣れてしまった声の主。

「柚木先輩……。」

「こんにちは、可純くん。」

柚木紗羅はにっこりと笑った。

「でも、もっと早くきてくれてもよかつたんじゃないかしら。」

「え、ええっ!？」

なぜか怒られてしまった。

戸惑う可純を見て、紗羅が首を傾げる。

「メール見てくれたのよね?。」

「見ましたけど……なんだつたんですか、あれ。」

「この景色が見えるところで待つてるって意味だつたんだけど……。」

「……。」

「……。」

「……。」

わかるか。

などと文句を言えるはずもない。

「そう。伝わってなかったのね。なかなか難しいものね、メールつて」

紗羅は右頬に掌を当て、ため息をひとつ。

いえ、単に先輩の求めるものが高すぎるだけです。

「えっと、あの写真って、ここから撮ったものなんですか?。」

「ええ、そう。……こっちよ。」

紗羅はくるりと体の向きを変え、可純の前を横切るようにして歩き出す。

瞬間、

弾むように揺れた蜂蜜色の長い髪が、かすかに可純の体を撫でた。どきつとする。

「どうしたの？」

「い、いえ……」

思わず固まってしまった体を動かし、慌てて後をついていく。向かった先はすぐ隣の教室だった。

「自習室？」

「そうよ」

答えながら紗羅はドアをスライドさせる。

中は通常の教室ふたつ分の広さ。ひとつひとつ仕切られたブース型の席が、向かい合わせにずらりと並んでいる。それが2列。

ここはその名の通りの教室だ。ライト付きの机が並んでいるだけの、自主学習のためのスペース。ただし、定期考査もまだ先で、ゴールデンウィークが目の前に迫った今は、利用している生徒はひとりもない。

「こつちがわたしの席」

「先輩、の……？」

案内されたのは、窓際の陽あたりのいい席。

「……」

そこを見て可純は啞然とした。

ブース内には自分で買ったであろうテキストや参考書の類が、ブックエンドを使って立てられていた。正面には手書きの時間割表の他、いくつかのメモが貼りつけられている。完全に席が占有され、私物化されていた。本来ならば誰でも、どの席を自由に使っていないはずなのに。

確かに『わたしの席』だ。

なんとも傍若無人な振る舞い。いつだったか周防麗が彼女を指し

て、フリーダム姫と呼んだのを思い出した。

紗羅はイスを引いて腰を下ろす。

「それでね、あの写真はこの窓から撮ったの」

「え？ あ……」

振り返れば窓の外に広がっていたのは、例のメールに添付されていた画像と同じ風景だった。

「あのときね、ここでひとり勉強していたら
授業中に、だろうか。」

そんな素朴な疑問がわく。

「ふと見たらきれいな青空だったから、可純くんにも見てもらおう
と思って送ったの」

「あ、それならボクも思いました。今日はいい天気だなんて」

可純は勢いよく紗羅へと向き直る。

「そう。じゃあ、同じように空を見て、同じことを思ったのね。素
敵なことだわ」

彼女は可純を見上げて微笑んだ。

傾きかけた陽の差し込む教室で、憧れの先輩が笑いかけてくる。
。可純は急に恥ずかしくなって、頬を赤くして顔を伏せた。

「ゴ、ゴールデンウィークもいい天気が続くといいですね」

「ゴールデンウィーク、ね……」

返ってきたのはちよっと浮かない声。

「どうしたんですか？」

「少しの間、可純ちゃんと会えないなって思った」

「……」

また赤面してしまうようなことを……。

顔が熱い。

今日のボクは変だ。

「そういうときのためのケータイじゃないかと……」

「ああ」

不意に紗羅が目を輝かせる。

「そうね。確かにそうだわ」

そういう発想はなかったらしい。

彼女は楽しいことを前にして心を抑え切れない子どものように、嬉しそうに体を左右に揺らしていた。

” / Scene 06 (前書き)

ゴールデンウィーク初日の朝の風景。
可純は父からの電話を受ける。

6 .

ゴールデンウィーク初日の朝。

梓沢可純の起床時間は午前8時だった。学校がある普段より2時間ほど遅い。

「うーん……」

真っ白いパジャマ姿のままベッドの上で行儀悪くあぐらをかき、両手を上げて伸びをする。立ち上がって窓のところへいくと、カーテンをあけた。差し込む朝日が可純の健康的な褐色の肌を照らす。

「おはよう、キャロル」

部屋の隅に目を向ければ、与えられた寢床で丸くなっているトラ猫。名前をキャロルという。だが、反応がない。

「おーい、ドジスン先生。朝だぞー」

再度呼ぶと、ようやく尻尾を2度ほど振ってみせた。起きているが起き上がる気はないらしい。そして、飼い主に向かってその態度もどろかと思う。

「……あいかかわらず、ぐうたらなやつ」

可純は呆れて嘆息をもらす。

ダメ猫はほうっておくことにして　パジャマをベッドの上に脱ぎ散らし、ホットパンツにTシャツというラフな部屋着へと着替えた。

2階の自室から1階へ。

まず顔を洗ってから、朝食の用意。今日は片サーサイドアップ面焼き卵とトーストだ。コーヒーマーカーで入れるコーヒーは濃いめに作って、牛乳と一対一にしてしまうのが可純流。……要するに背伸びをしているのだ。テーブルにそれらがすべてそろい、トーストに最近お気に入りマンゴージャムを塗りたくったところで、リビングの電話が鳴った。休日こんな時間にかけてくるのは、ほぼ確実に家族だ。

可純はトーストを持ったままリビングへと向かった。
ナンバーディスプレイ機能によって表示された番号は、家族の引
越し先のものではなく、父が勤務する研究所のものだった。父は
休日でも出勤らしい。

これで取らなかつたら、次はケータイが鳴るんだろーな

可純は受話器を取り上げた。

「もしもし？」

『おはようございます、可純くん。僕です』

電話越しの、張りのある声。まだ若いのに研究者然とした父の顔
が頭に浮かぶ。

「ん、おはよう」

答えてから、小さめにトーストをかじった。

『どうですか、そちらは』

「特に変わりはない。大丈夫。心配するようなことは何もないよ」

『そうですか。安心しました』

電話の向こうで父が微笑むのがわかった。

「そっちは休日なのにお仕事？」

『そうなんですよ。休みだったら帰れたんですけどねえ』

そう言う父の声には、しかし、嘆くような響きはなかった。スタ
ートを切ったばかりの研究所の仕事は、忙しくも充実しているのだ
ろう。

「帰れないから羽純ちゃんが寂しがってるんじゃない？」

羽純ハスミとは可純の妹の名前だ。

彼女の場合、中学3年生に上がる前に急に引越すことになって
しまった。ゴールデンウィークには帰ってきて、こちらの友達とも
会いたかっただろうに。

『そうですね。でも、今日はこっちでできたお友達と遊びに行くら
しいですよ。僕が家を出るころには朝ごはんを食べてました』

「ふうん、そうなんだ」

どつやら可純と同じらしい。

「こつちはいい天気だけど、そつちはどう？」

『それがですね　天気はいいんですよ、天気は』

そこで父の声に次第に泣きが入りはじめる。

「でも、少し風がありましてね。おかげで僕の愛車が灰だらけですよ」

ああ、桜島かあ　と、トーストを口に運びながら思う可純。

「せっかくだから車、シンデレラって名前にする？」

『可純くん、笑えませんよ、それ。まったく……おのれ、火山灰！』

壊れ気味の父。それもそのはず。車はまだ買って半年ほどなのだ。休日にはせっせと洗車や車内の掃除をしていた父の姿が思い出される。

「いいのかなあ、そんなこと言つて。怒らせると怖いよ。あれ火山だもの」

『確かに、それは困りますね。後でそちら方面に向かって謝つておくことにしましょう』

どこまで本気なのかわからないが、地質学者である父は自然の怖さについては重々承知だ。

『ところで、今日は可純くんはどうするんですか？』

「今日はボクも学校の友達と遊びに行く予定」

『そうですか。じゃあ、気をつけて行ってきてください』

そつ父は微笑むように優しく言い、電話を切った。

可純も受話器を置いて、ダイニングテーブルに戻る。

ゴールデンウィーク初日の今日は、耀子たちと遊びに行く約束をしていた。待ち合わせは正午だが、それまでに掃除や洗濯、この朝食の後片づけなど、やっておきたいことはたくさんある。

「あ、そう言えば、耀子が一時間早くこいって言つてたな……」

可純はトーストにかじりつきながら時計を見た。何時に家を出て、それまでにどんな順番で家事をするか　。頭の中では午前の予定が組み立てられていった。

” / Scene 07 (前書き)

クラスメイトと遊びに行く可純。

その最中、可純は忘れられない、でも、どこか曖昧な記憶を呼び起こす。

7 .

待ち合わせは正午。

ただし、耀子には1時間早くこいと言われていた。即ち、11時。可純はそれに十分間に合うように家を出た。最寄の駅から電車に乗り、ふた駅めで乗り換え。学校がある学園都市とは反対方向へ。

程なく一ノ宮に着き、電車を降りたのが11時15分前。待ち合わせ場所である改札口正面、大スクリーン前には、すでに耀子の姿があった。

オフショルダーのトップスにデニムのロングパンツ姿。きれいな鎖骨が露わになっているが、ロングなので全体的に露出は少なめだ。対する可純は、ショートパンツにハイソックス、タンクトップの上から袖の短いゆったりとしたニットの上着を着込んだだけ。腕も足も褐色の肌が見えている。なにせ今日は全国各地あちこちで夏日を観測しているのだ。

「早いな、耀子。もうきてたんだ」

寄って声をかける。「まあね」と、耀子。

「早くきてここに立ってたら、ナンパされたりして」

特に着飾っているわけではないが、背が高くてスタイルもいい耀子は、兎に角よく人目を引く。

「まさか」

しかし、耀子は茶化す可純を一蹴した。

「そんなのがいたら先に睨んでやるわよ」

「あー……」

それならナンパなどされるはずもない。耀子に睨まれたら、たいていの男は声もかけずに引き返すことだろう。

「で、耀子に言われた通り1時間早くきたけど、何かあるわけ？」

可純は話を変える。

「近くに美味しいコーヒーショップがあるのよ。そこに可純を連れていこうと思ってる」

「へえ。……って、あれ？ それだったら樹里とへーさんがきてからでもよくない？」

「まあ、そうなんだけどね」

耀子は口調を歯切れの悪いものにしながら、頭を掻く。男前な仕種だと可純は思った。

「あんただけ苦手でしょ、コーヒー」

「そう、かな？」

可純は曖昧に首を傾げた。

毎朝飲んでいるコーヒーと牛乳が一对一のカフェオレを思い出す。確かにちよつと背伸びして飲んでいるところがある。だけど、コーヒーが苦手なのは自分だけだろうか。樹里はどちらかというところ紅茶党だ。学校でもよく飲んでいるのを見かける。そして、英理依の場合、ちよつと変わったものを好む傾向にある。普通に豆乳やらおしるこやらを飲んでいるのだ。

「まあ、いいか」

尤も、だからと言って、コーヒーが飲めないことの証明にはならないのだが。

「きつと可純も気に入ると思うわ」

「そっか。じゃあ期待してる。行こう」

ふたりはさつそく並んで歩き出した。

可純と耀子が待ち合わせ場所に戻ってきたのは、正午少し前だった。コーヒーショップのコーヒーは耀子が勧めるだけあって、確かに美味しかった。可純が頼んだのはやっぱりアイスのカフェオレだったが、次にくる機会があればもっと別のものを頼んでみようと思っていた。

正午に合わせて戻ってきてみると、すでに樹里が立っていた。

白い肌アッシュブロンドアイスブルーに灰銀髪と蒼氷の瞳。生粋の日本人では持ち合わせない手

足と頭身のバランスはそれだけで人目を引くというのに、ボーイッシュなパンツルックまでファッショナブルでセンスがよいとくれば、目立って仕方がない。通りかかる人が横目で見ていくだけでなく、完全に足を止めて遠巻きに見ているものまでいる。

そんな樹里にふたりが寄っていくと、彼女は怪訝そうな顔をした。「たまたまその辺で一緒になった……って感じじゃないな。ふたりそろってどこかに行ったのか？」

「うん。耀子オススメのコーヒーショップにね。美味しかった」
正直に答える可純。

「ふうん」

と、樹里は何か言いたげに耀子を見た。

「……」

耀子はばつが悪そうに、それでいて不貞腐れたようにそっぽを向く。

横でそれぞれの視線がどういう意味を持つのかかわらず、可純はひとり首を傾げた。

と、

「あ、へーさんだ」

3人がいる大スクリーンの前、改札口の向こうに、へーさんこと入江英理依の姿が見えた。彼女は寮生なので、学園都市からきたことになる。切符を自動改札に吸い込ませ、出てくる。清楚なロングスカート姿。

これで全員がそろった。

ちょうど正午だった。

4人はまず高架下のバラエティに富んだ個人商店などを見て回ってから、ひと休みのランチタイムにファーストフード店に入った。

午後2時少し前。

遅い昼食と表現するには遅すぎる気もするが、時間に縛られないスタイルは悪くはなかった。

店内はそんな時間にも拘らず、10代、20代の若もので賑わっていた。

空いていたテーブルに座る。4人掛けのテーブルに本当に4人で座り、トレイを並べると少々窮屈に感じる。

「この後はセンター街のほうに行ってみたいですよねえ」

のんびりした口調で英理依が提案した。特に異論はない。だいたいみんな考えていたことだった

「お、すっげえ。自爆テロだって」

不意に興奮した声が耳に飛び込んできた。隣のテーブルからだ。

大学生くらいの青年だった。モバイルのニュースサイトに入ってきた速報なのだろう。携帯電話のディスプレイを、横にいる連れ合いの男と一緒に覗き込んでいた。

ただ、興奮した調子の声は、ショーでも見るような他人事のそれだ。

「どれどれ……うん、これだな。中東で自爆テロ。死者多数、か」
可純の正面に座る樹里が自分の端末を開いていた。すぐにそのニュースに当たったらしい。

「テロ……」

可純は我知らず、その単語をつぶやいていた。
軽い眩暈感。

思わず目を閉じ 後悔した。

記憶のフラッシュバック。

可純にとつて忘れられない、でも、どこか曖昧な過去の再生。

それは東欧の小国で起きた航空機事故。

着陸後間もなく爆発した旅客機。

機体が吹き飛び、炎をまとった破片が慣性で滑走路を滑っていく。
爆風で割れた旅客ターミナルの窓ガラス。

ターミナル内に悲鳴と怒号が飛び交う。

「危ないから近づいちゃダメ！」

駆け出そうとした可純を、誰かがきつく抱きしめた。

パリからの便。

あれに乗っていたのは……。

「可純くん、顔色悪いですよ?」

その声で意識は現実に戻された。目を開けると、斜め向かいの席から英理依が心配そうに見つめていた。樹里もディスプレイから目を離し、こちらを見ている。

「ほんとだ。大丈夫か?」

「あ、うん。大丈夫。なんかテロって聞いて、いろいろ考えちゃって」

「優しいな、可純は」

樹里が微笑む。

「なんでテロなんて起こすんだろっね」

可純はストローに口をつけ、喉を潤してから疑問の言葉を紡いだ。

「政治的な目的を果たすため、だろっな。暴力的な手段でさ」

「自爆テロみたいに、自分の命を捨てて?」

「うーん……」

樹里は腕を組んで天井を見上げる。

それについては可純は、自分の考えを持っていた。

きつと効率の問題なんだろうな

人ひとりの命で何ができるかと考えたとき、最大限の効果を上げる手段として行き着くのが自爆テロという手法なのだ。

例えば9・11のアメリカ同時多発テロ。安全な飛行と着陸ということを考える必要がなく、単純に旅客機を目的地に向かって飛ばし、そこにぶつけるだけなら簡単な訓練だけですむという。そして、実際にアメリカ資本主義経済の象徴であるワールドトレードセンターを破壊することに成功している。強奪した旅客機を使い、数人の犠牲でこの成果。おそろしく効率的だ。

「いいのよ」

そう言ったのは、隣の耀子だった。

「私たちが考えるようなことじゃないわ」

「ま、そうなんだろうけどね」
苦笑する。

日本で生きていれば、自分の住む街でテロが起こるようなことがない限り、ずっと無縁でいられるだろう。今も世界のどこかで起こっている悲劇について真面目に考えなくても、誰も責めはしない。

「可純はね、考えなくていいの」

耀子の手が伸びてきて、可純の頭を2度、優しく叩いた。

遅い昼食の後、4人はセンター街に場所を移した。

センター街は衣と食の店が立ち並ぶ通り。駅前に林立するデパートに比べて、気安くて取っつきやすい店ばかりなのが特徴だ。

「さっきのボンボン、絶対可純くんに似合うと思うんですよねえ」

「そうかな？」

目にするものはどれも心惹かれるものばかりで、歩きながらの会話も弾む。

「プレゼントしてあげたいです」

「あ、それは嬉しい。でも、気持ちだけでもらうとくよ。実はボク、ゴムならけっこういっぱい持ってるんだ」

「いちばんよくつけてるのは、赤い玉がふたつのやつね」

そう言ったのは耀子。

「お、さすが。よく見てる」

樹里が茶化す。

「だって、耀子はボクの後ろの席だもん」

ね と、可純は耀子に笑いかけた。

「だってさ。あれ絶対わかってないぞ」

「樹里。あんた、うるさいわよ」

そんなやり取りしながら通りを歩く。

可純は何か面白そうな店はないかと、左右に立ち並ぶ店舗を見回した。

と、

「ん？」

その途中、視界の中に知った顔を見た気がした。視線を一度は通り過ぎた正面へと向ける。

「あ……」

見間違いではなかったようだ。

前から柚木紗羅と周防麗が歩いてきていた。

ふたりのうち先にこちらに気がついたのは麗。彼女は隣の紗羅を肘でつつくと、可純たちのグループを指で指し示した。遅れて紗羅が気づき、笑顔を見せる。

「あらあら、あれは柚木さんたちですね」

「あ、ほんとだ」

並行して樹里と英理依が、ふたりの先輩の姿を認めた。当然、耀子も気がついたことだろう。

ふたつのグループが出会う。

「こんにちは」

「よ、かわいい後輩たち」

紗羅と麗がそう言い、可純たちも口々に挨拶を返す。

可純は紗羅の口から自分の名前が出なかったことに、密かにがっかりした。こっちは4人いるから仕方のないことなのかもしれない。

「あなたたちもきてたの。今日はいい天気だね」

「会えて嬉しいです」

「ところで、先輩たちは何を食べてらっしゃるんですか？」

樹里と、その後に英理依が続く。

見れば紗羅も麗も、アイスクリームらしきものを手に持っていた。

「これ？ そこのお店で買ったジェラート。美味しいわよ」

「じゃあ、次はそこに行ってみようか」

「もしかしたら並ぶかもしれないから、覚悟しとけよー」

麗が笑う。そんなに評判の店なのだろうか。

「じゃあね、あなたたち。また学校でね」

そうしてふたりの先輩は、可純たちの横を抜けていった。

ただ、去り際、紗羅が可純をちらりと見た　　ような気がした。

……気がしただけかもしれない。

「店はあっちみたいだな。行ってみよう」

こちらも樹里を先頭に歩き出した。

後をついていきながら、可純はかすかに口を尖らせていた。紗羅が自分に話しかけてくれなかったからだ。名前を呼んで、少しくらいふたりだけの話をしてもらいたらと思う。

少し歩いたところで、ポケットに突っ込んだ携帯電話がくぐもつた着信音を奏でた。音と振動はすぐに止まる。メールだ。

歩きながら端末を取り出し、ディスプレイを見た。隣では樹里たちのおしゃべりが続いている。

メールの差出人は、今さっき別れたばかりの紗羅だった。

そして、本文はいつぞやと同じく、たった一文。

『明日はわたしとデートです。』

” / Scene 08 (前書き)

ゴールデンウィーク2日目の今日は、紗羅とデートの日。
可純が待ち合わせ場所に着いたときには、すでにトラブルははじま
っていた。

8 .

ゴールドデンウィーク2日目。

「おはよう、キャロル。よく眠れたみたいだね」

朝、ベッドの上でむくりと体を起こした梓沢可純は、部屋の隅に寝ているトラ柄の毛皮、もとい、トラ猫のキャロルに声をかけた。

キャロルは少しだけ首をもたげて飼い主を一瞥すると、すぐにまたもとに戻って数回尻尾を振った。よく眠れたどころか、まだ寝るつもりようだ。そんなふうには怠惰だから太るのだろう。

「かく言うボクは、ぜんぜん寝られなかったんだけどね」

可純は苦笑気味に言って、立ち上がった。

まずはいつものようにパジャマから部屋着に着替える。それから机の上の宝石箱のような小もの入れを開けた。中にはいろんな髪ゴムが。

「……………」

じつと睨んで考えた末、結局、いちばん気に入っているものを取り出した。赤い玉がふたつついたやつだ。

それを持って1階へ降り、洗面台では鏡を睨みながら、いつもの3倍の時間をかけて髪をセットした。

これでよし　と満足した瞬間、

「ふぁーあ……………」

あくびが出た。

夕べはあまり寝られなかった。

それもそのはず。今日は柚木紗羅と一緒に出かけられる約束をしている日なのだ。類稀なる美少女であり、校内でも憧れる生徒の多いもちろん可純もそのひとりの、その紗羅から誘われ、その日を利用して眠れるはずがない。故の、寝不足。

「デート、だってさ」

可純は鏡に顔を写しながら、思わずにやける。

紗羅がそう言ったのだ。

明日はわたしとデートです、と

だから、今日彼女と会うのは、デート。

「って、いつまでもこうしてられない」

可純は顔を引き締め、もう一度だけ自分を見直してから鏡の前を離れた。

待ち合わせは昨日同様、やはり一ノ宮の大スクリーン前。

いちばん大きな改札口のすぐ目の前であって、これほどわかりやすい場所はない。待ち合わせに重宝されているスポットだ。

今日の可純は、白のショートパンツに白とクリーム色のヨットパーカーというスタイル。紗羅と会うこともあって、どんな服を着ていこうかずいぶん悩んだものだったが、最終的に参考にしたのは昨日の樹里だった。いや、かつてはモデルをしていて、今でもファッションリーダーである樹里を真似るというのもむりがある話なのだが、それでも彼女のボーイッシュなファッションは可純にとって都合がよかった。

尤も、ならこれで紗羅の横に並んで恥ずかしくないかというところ、それはまた別問題なのだが。自分とは素材からして違うと思う。

きつちり15分前に待ち合わせ場所に着いた可純がそこで見たものは、大スクリーン前に立つ紗羅と、彼女に懸命に話しかけているいろいろと軽そうな男二人組だった。可純と同年代の、高校生くらいの少年たちだ。すぐにナンパという単語が思い浮かんだ。それを裏づけるかのように、紗羅の顔は鬱陶しそうで、完全に無視を決め込んでいいるようだった。

そりゃナンパもされるよ。あの容姿だもの。

むりもない、と苦笑した。

取り込み中だが（主に少年たちにとって）、こうして見ている仕方がないので近づいていく。自分が行けば紗羅もそこを離れるこ

とができる。助け舟にはなるはずだ。

「あのー……」

可純はおずおずとその場に進み出る。

その声を聞いて、ナンパ少年を無視するようにそっぽを向いていた紗羅の目が可純を捉えた。途端、ぱつと笑顔を見せる。

「すいません。遅くなっちゃって」

「ううん、いいのよ。それにまだ時間になってないんだから」

確かにまだ時間前なのだが、紗羅を待たせてしまった上、少なからず彼女を不愉快な目に遭わせてしまったのだ。やはり申し訳なく思う。

遅れて少年たちも可純へ振り返る。

「待ち合わせしてるっていうトモダチ？」

「うわ、なんか黒っ。日焼け？ てか、黒人？」

直後、何がそんなにおもしろいのか、ふたりで笑い出す。

可純は一度、目だけで天を仰ぎ、おもむろにため息を吐いた。

またか、と思う。

肌の色のことはよく指摘されることだし、黒人だなどと言われることもある。実際、可純のルーツのひとつはカンボジアだ。有色人種の血を引いている。それがなんだというのか。マイケル・ジャクソンだって作品の中で言っている。『It don't matter if you're BLACK or WHITE.（黒か白かなんて関係ないさ）』と。だから、それを指摘されて傷ついたことは一度としてない。先ほどのように、またかと思うだけ。だいたい有色人種を目にただけで笑えるメンタリテイの持ち主の中には、時々日本人が白人だと勘違いしているものもいるのだ。そんなのを見れば呆れもする。

不意に、破裂音にも似た乾いた音が、可純の耳を打った。

「人の肌の色を笑うなんてサイテー」

最大級の軽蔑が込められた紗羅の声。

どうやら紗羅が少年のひとりの頬を、平手で張ったようだ。驚い

て動きを止める二人組。バカ笑いも止まっている。

「行くわよ、可純くん」

言って可純の手を掴み、ナンパ少年たちに背を向けて歩き出した。可純は引かれるままについていく。

しかし、一瞬は圧倒されたものの、女の子に平手打ちを喰らって黙ってはいられないのが少年たちのほう。

「ちょ、ちよつと待てよっ」

「ついてこないでくれるかしら？」

負けじと紗羅もくるりと振り返り、間髪入れず言い放つ。

「これ以上わたしたちにつきまとうなら、大きな声を出すわよ」

「ああ？」

それでも少年たちは引き下がらない。それどころか威嚇するような声を上げる。頬を張られた上、ここまで言われて、頭に血が上っているようだ。紗羅が大きな声を出すまでもなく周りがざわつきはじめているのだが、彼らにはそれが見えていない。

と、そのときだった。

「おっと、そこまでだ」

いきなり現れた誰かが少年たちの間に割って入り、それぞれの肩を抱いた。

「我が校のお姫さまたちが帰れって言ってるんだ。素直に失せようぜ。……な？」

馴れ馴れしい態度で肩に手を置いてるが、その実、がっちりとホルドしている。

突然ふたりの間にぬつと出てきた顔を、可純はよく知っていた。

「ああ？ 誰だよ、お前」

「俺？ 俺は翔星館高校3年、相坂恭一郎。よろしく」

そう。そのスタイリッシュな眼鏡の似合う繊細なつくりの顔は、『翔星のプリンス様』こと相坂恭一郎だった。

「あ、相坂って……」

「あの相坂かよ……！？」

少年たちは口々に驚きを表す。

相坂は何も言わない。

「ちっ」

「行こうぜ」

結局、ふたりは乱暴に相坂の腕を振り解くと、集まっていたギャラリイを押しつけ、悪態をつきながら去っていった。どうやら面倒なことにはならずすんだようだ。

残ったのは可純と紗羅と、相坂。

「よ、大丈夫か？ 梓沢に、柚木」

その相坂は悪ガキのような笑みを見せる。

「相坂君、あなたねえ」

だが、紗羅はなぜか明らかに怒っていた。

「おっと、今日はたまたまだけ、たまたま。知ってるだろ、センタ―街の楽器店。あそこに用があつてきただけ」

「……」

そんな説明にも紗羅は、腕を組んで睨みつけるだけ。可純はとうとう、そのふたりをばらはらした思いで、交互に見ることしかできなかつた。

「安心しろよ。今日の俺はプリンスじゃなくてナイトだからな。役目は終わったみたいだし、これで退場するさ」

相坂はやれやれとため息をひとつ。

「じゃあな」

そうして身を翻し、背中越しに手をひらひら振って、立ち去った。

「まったたく……」

と、紗羅。

こちらもため息だった。

そして、可純もやはり、紗羅と遠ざかる相坂の背中を交互に見、ただただ首を傾げるばかりだった。

” / Scene 09 (前書き)

いざデートがはじまったのはいいが、肝心の紗羅の機嫌がよくない。
それでも何とか機嫌は直り、ふたりは再スタートを切る。

9 .

これはデートだったはず。

憧れの先輩とのデート。

そうと決まったときから類は緩みつぱなしだし、今日はどんなことがあるだろうと考えただけで昨夜はろくに寝られなかった。

なのに、今のこれはどういうことだろう。

紗羅はむすつとしたまま、ひと言も口を聞くことなくずんずん歩いていく。可純はそんな彼女の後ろをついていく。時々またナンパや、可純もよく知っているティーンズ向けの雑誌の名前を言って声をかけられたりするのだが、それもすべて無視。ガン無視。あまりの無視具合に思わず可純が謝ってしまった。

こんな調子になったのは、相坂が現れてからだ。彼の顔を見た途端、紗羅が不機嫌になってしまったのだ。だが、原因がそれだとわかってても、理由まではわからない。相坂の何が気に喰わなかったのだろう。ナンパ少年たちと険悪な雰囲気になりかけたところを助けてくれたというのに。

そして、その相坂である。

可純は紗羅と相坂の関係が気になっていた。

前に一度、彼の話題に触れたときはそんな素振りもなかったが、なんらかの関係はあるはずだ。少なくとも、同じ学校で名前を知っている程度、ではないはずだ。それ以上に関わったからこそ、顔を見たら腹が立つ関係にも至れるのだから。

とは言え、どれだけ頭をひねったところで可純には答えがわからないし、ろくな推測もできない。紗羅に直接尋ねるのが最も手っ取り早いのもかもしれないが、それもまた勇気のいる話だ。

不意に、紗羅の足がぴたりと止まった。可純も立ち止まる。

それから彼女は少し間をおいてから振り返った。まるで3つ数え

たようなリズム。

「ダメね。いつまで腹を立ててちゃ」

その口から、自分自身に呆れるように、ため息がもれた。

「彼も他意はないって言ってたものね」

「はい。なんか、そんなことを……」

言っていた。たまたまだと。つまり、だから許せと、そういうことだ。やはり紗羅は相坂が目の前に現れたから怒ったということか。「今日はせっかくの可純くんとのデートなんだから。こんなことで時間をむだにしたら勿体ないわ」

ね？ と、紗羅は微笑んでみせた。

思わず可純は赤くなる。改めてデートという単語を口にされ、微笑みかけられたのだ。赤くなるなというほうがむりだ。

「それで」

紗羅は腰に手をやり、辺りを見回した。

「ここはどこなのかしら？」

「……」

それもわからないまま突き進んでいたのか。

「どうやらチャイナストリートみたいね」

一ノ宮の駅周辺からは少し離れた、中華風の点心やスイーツの店、レストランが並ぶ通りだ。

「わたし、中華料理はあまり好きじゃないのよね。……戻りましょ。いいお店を知ってるの。パスタのお店。お昼はそこにしましょ。可純くんもいいわよね？」

紗羅は一気にまくし立て、勝手に決めてしまった。さっそくきた道に戻りはじめる。

可純は慌ててその後を追いかけた。

そうしてつれてこられたパスタの店。

内装はすべて木目調で、落ち着いた雰囲気があった。駅のショッピングセンターの地下ということもあって、店内はほどほどに混ん

でいる。案内されたのは壁際の席。紗羅が壁を背にして座ったので、可純の視界の中には彼女しかない。パワーテーブルのようだとか純は思った。

「それにしても最初の二人組、すごく失礼。可純くんにあんなこと言うなんて」

美貌の先輩は、未だにご立腹だった。ただし、相坂のこととは別件でだが。紗羅はふくれっ面をしながらも、手ではスプーンとフォークを使ってパスタを巻き取っている。

「まあ、本当のことですから。色が濃いのは」

答える可純のほうは、使うのはフォークだけ。皿上のパスタにフォークを突き込み、巻き取ってそのまま口に運ぶ。とは言え、口が小さいので一回一回の量はかわいらしいものだ。

確かに紗羅の言う通り、あの手合いの無神経さには呆れる。だけど、今はそれより、まるで自分のことのように怒ってくれる紗羅の気持ち嬉しかった。

「ボクの家系って、国際色豊かなんですよ」

そんな可純の身の上話。

可純は自分が3つの人種の血を受け継いでいることを語って聞かせる。

「素敵な話」

聞いた紗羅が笑みを見せた。

「先輩は変だとか思いませんか？ ボクの肌の色」

「いいえ、ぜんぜん。わたしは好きよ。それに、そうね」

そこで一度、切る。

「チョコレートみたいで美味しそう」

「ッ!？」

ぼん、と可純の顔が一瞬で赤くなる。わたわたと慌てて、無意味にばたばたしてしまった。美味しそうってなんだ。

それを見て紗羅が可笑しそうにくすくすと笑う。

今度は可純がふくれっ面になる番だった。それでも紗羅が好きだ

と言ってくれて、ほっとしたり嬉しかったり。なぜなら、可純は自分の血に誇りを感じているからだ。

当時はまだ差別意識も強かったであろう時代に、カンボジア人の曾祖父とフランス人の曾祖母が愛し合って祖母が生まれ、その彼女とフランス留学中だった日本人の祖父が結婚して母が誕生した。そして、その母と父の子が可純だ。そうやって紡がれてきた血筋に誇りを持たないはずがない。

また、だからこそ命の重さというものも強く感じる事ができる。
「……」

自分は父と母の命を背負っている　そう思う。

「可純くん？」

「ほわ？」

我に返る。いつの間にかもの思いに耽っていたらしい。それでも手だけは意識と乖離したように動いていて、フォークには可純の口に余る量のパスタが巻きついていていた。

「えっと……」

「パンのおかわりはいかがですか？」

と、そこにフリルのついた白いエプロンのウェイトレスが、パンの入ったバスケットを抱えてやってきた。この店では一度パンを注文すれば、後はおかわり自由で、こうやってたびたび焼きたてのパンを持ってきてくれる。香ばしい薫りが可純の鼻をくすぐる。

「あ、いただきます」

「かしこまりました」

笑顔で応えたウェイトレスは、パンをトングで掴み、可純の皿に乗せる。ついでにバターが残り少ないのを見て、新しいのを置いていってくれた。

「よく食べるのね」

感心したような紗羅の声。

「すいません。燃費が悪くて……」

可純はコンパクトな体ボテのわりに燃料を喰う。尤も、それはたくさ

ん食べるというよりは、しっかり食べるという類のものだ。幼いころから食生活が乱れたことはないし、今だって朝を抜いて登校した試しはない。

「でも、見てると気持ちがいいわ。……そうね、この後も食べ歩きがいいかしら。いくつか美味しいものを知ってるわ。ぜんぶ回りましょ」

そのひと言で今後の方針が決まった。

昼食の後も、場所をセンター街に移して、食の旅が続いた。

まずはクレープを買って、それを片手にアクセサリや服の店を、目についた端から見て回った。そして、今度は昨日のジェラートの店へ。これが向こうのチャイナストリートになると、肉まんや豚足を食べながらの肉切り包丁や青龍刀のウィンドウショッピングという、女子力の欠落したものと変わる。

ジェラート屋は大きなキャンピングカーを改造したような店で、歩行者天国になっている通りの真ん中にあつた。そばにはパラソル付きのテーブルとチェアも置かれている。可純も紗羅も、一緒にきた相手は違えど、昨日も訪れた店だ。

今はちょうど客の切れ間だったらしく、すぐに注文することができた。昨日はけっこう並んだというのに。先輩と一緒にだからだろうか。などと可純は、紗羅を敬愛するあまり不思議な力を勝手に作り上げてしまう。

「じゃあ、先にそちらのお姉さんからね」

即断即決。先に注文していた紗羅に、イチゴミルクのジェラートが渡される。

「ありがとう。これ、この子の分もね」

「え？ あの、先輩、今度は自分で、というか、ボクが……」

先ほど食べたクレープも紗羅の奢りだったので、今度は可純が出すつもりでいたのだが。

「気にしないで。これくらいいたいしたことじゃないわ。それに、わ

たしのほうが年上なんだから。……向こうで待ってるわね」

紗羅がその場を離れる。見れば可純たちの後ろに客が並びはじめていた。あまりぐずぐずしてられないようだ。

「はい、お待たせ」

「ありがとうございます」

さほど間をおかず、可純もマンガーのジェラートを受け取った。

紗羅の姿を探し　すぐに見つかった。

「うわ」

思わず声を上げてしまったのは、このほんの少しの間に、紗羅がまた男に声をかけられていたからだ。可純の口から苦笑がもれる。こんな調子じゃ、ちよつと出かけるだけでもたいへんそうだ。

近づいていくと、紗羅が笑みを見せた。どこか少し悪戯っぽい色。

「この子がわたしのかわいい恋人よ」

「「えっ？」」

驚きの声を上げたのは男と、可純。

男は目を丸くして、紗羅と可純を交互に見る。当然の反応だ。

「え、いや、でも……」

「つまりそういうこと。悪いけどわたしたち、今デート中なの。邪魔しないだね。……行きましょ、可純くん」

そして、紗羅はそんな男を尻目に、可純と手をつないで歩き出す。

「……て、手ー!？」

心の中で絶叫する可純に、しかし、紗羅はかまう様子はない。

ふたりは手をつないだままセンター街に行く。

空は晴れ渡って程よい陽気で、行き交う少年少女は、皆そろって春の装いで楽しげに笑顔を見せている。

でも、可純だけうつむき加減。

なぜなら、頭の中では紗羅の発した恋人という言葉がずっとリフレインしていて、つないだ手が必要以上に意識してしまうから。顔も上げられない程どきどきしている。

隣では紗羅が「さっきの顔、見た?」とか「次はどこに行こうか

しら」とか、いろいろ話しかけてきているのだが、可純は「……はい」「……はい」と全自動な返事を返すだけで、気持ちは上の空。ジェラートも口に運んではいるが、味なんてわからない。というか、顔に近づけただけで溶けるのではないかと思う。それくらい顔が熱かった。

と。

「可純くん」

名前を呼ばれ、

「え？」

口の端をぺろりと舐められた。

瞬き数回。

「え、え？ ええっ!?!」

可純は何が起こったか理解できないまま、驚いて紗羅を見る。

「口の端にジェラートがついてたわ」

彼女は事もなげに、さらりと言う。

「だ、だったら、普通に拭いてくれたら……」

「両手がふさがってるもの」

ジェラートを持った手と、可純とつないだ手を肩の高さまで持ち上げて示す。

「じゃあ、口で言っておしえてくれるとか」

「ああ、確かにそうね」

まるで今気づいたような言い方。尤も、本当に言われるまで思い至らなかつたかは、可純にはわからない。

「あら」

と、何かに気づいたように、紗羅。

「なんですか？」

「チヨコ味」

「そんなはず不是吗よ、もう……」

からかうような笑みを見せる紗羅に、呆れていいやら怒っていいやら。たぶん、どっちでも笑って流される気がするが。

「少し疲れたわ。はしゃぎ過ぎたのかしら。一度どこか落ち着いたところで休みたいわね」

紗羅がそう言い出したとき、「もう?」というのが可純の正直な感想だった。

無論、自分が健康優良児であるという自覚はある。じつとしてい
るより体を動かしているほうが好きだ。だけど、それを差し引いて
も、少しスタミナがないんじゃないかと思う。昨日の今ごろは、耀
子も樹里も、おっとりしている英理依ですら、まだまだ元気だった。
「この辺だったらどこがあったかしら」

「あ、ボク、いいところ知ってます」

己の頭におさめられた情報を検索しようとする紗羅に、可純は申
し出る。

「そうなの?」

「えっと、まあ……」

知ったのは、つい昨日のことですがー。

「そう。じゃあ、任せようかしら」

「はい。任せてください」

可純は勢いよく返事をする。ここまでずっと紗羅に任せつきりだ
ったので、頼られるのが嬉しかった。俄然、張り切る。

可純を案内役にふたりが向かったのは、センター街からは駅をは
さんで反対側。そちらは賑やかな繁華街とは違い、オフィスビルが
立ち並ぶ一角だった。その中のひとつの地下に、その店があった。
しかし、地下といっても半分だけ埋もれるような構造なので、表通
りからでも数段下りた階段の先に入り口は見えている。尤も、一見
して何の店か判断がつかないから、入りにくいことには変わらない
が。

「……ここなの?」

紗羅も入り口を見て、不安げにそう口にした。

可純はちゃんとここが喫茶店であることを知っている。昨日、耀

子につれてこられたコーヒーショップがここなのだ。

店内は、馬車が走っていたころの英国を思わせる雰囲気があった。きつとそれをイメージしてデザインしたのだろう。店のどこかに英国紳士がパイプをくわえて座っていてもおかしくなさそうだ。

「こないいいお店を知ってるなんて、見直したわ」

「は、はは……」

紗羅はすっかり気に入ったようだ。顔が引き攣ってきた。いよいよ友達におしえてもらったなんて言い出せない。

程なく、ふたりの前に頼んだコーヒーが置かれた。

紗羅はミルクだけを入れ、可純はミルクに加えてシュガーも落とす。

美貌の先輩はコーヒーを口にしても何も言わなかった。お気に召さなかったのだろうか。いや、むしろ逆だ。満足いったからこそ、黙って味わっているのだ。

可純もそれがわかったので、わざわざ聞くことはしなかった。その代わり、彼女の優雅な所作に見惚れる。

「……」

前にも思ったことだが、ふとした瞬間に彼女の美しさに神がかったものを感じる時がある。初めて会った日、目の前で笑いかけられたときもそうだった。類稀なる美少女と称される背景に神秘性が垣間見えるのだ。

唐突に 可純は桜を連想した。

桜はすぐに散るからこそ美しいのだと、よく言われる。しかし、それを人と重ねるのはあまりにも不吉だ。可純は慌ててその想像を頭から追い払った。

と、そこでコーヒーを飲んで人心地ついた紗羅が、いきなり切り出した。

「今日はこの辺りでお開きにしましょうか」

「えっ？」

その不意打ちに、可純は思わず声を上げる。

確かにもう夕方だが、高校生の休日としては少し早すぎる気がする。

「寂しい？」

紗羅は微笑みながら尋ねてくる。

「正直言って……、はい」

もっと一緒にいたいし、一緒にいられると思っていた。

可純の声が沈む。

「わたしもそう。でも、可純さんと一緒にちょっとはしゃぎ過ぎたのね。少し疲れたわ。だから、今日はここまでにしておきましょう」

「はい……」

「聞き分けのいい子は好きよ」

彼女は大人の表情で微笑む。

そんな顔に見つめられて、可純はまた顔を赤くした。

「これくらいが丁度いい気がするの。また可純さんと会いたいと思うもの。ゴールデンウィーク中はもう予定が入っているから、そうですね、次は学校かしら」

「学校……」

もし学校でも今日みたいだったら、と思ってしまう。きっとたいへんだろう。羨ましがられたり、嫉妬されたり。特に入学したばかりの1年生には柚木紗羅のファンが多い。果たして、その視線に耐えられるかどうか。

「そうだ、ラウンジにも招待しないと。約束だし、今日のこのお店のお礼にもなるわ」

「……」

しかし、紗羅は可純の心中などまるで気にしない。さすがフリーダム姫。この調子だと試練の日は近いかもしれない。

うわあ。

だけど、密かに頭を抱える可純とは正反対に、当の本人はほんの少し先の未来に思いを馳せるような目をして、笑顔でコーヒークップを口に運んでいるのだった。

第3章 運動方程式 / Scene 01 (前書き)

英理依のせいで学校に遅刻することになってしまった可純。
しかし、いつもと違う登校時間の中で、深町七瀬と再会することになる。

第3章 運動方程式 / Scene 01

なぜ鉄の球と羽毛が同じ速度で落下するのか？

1 .

ゴールデンウィークが明けて、ちよつとだけまた涼しさが戻ってきた。

「むぎゅ」

その初日の朝、可純は混雑した電車の中で、人々にはさまれ、情けないうめき声を上げていた。

いつもならラッシュアワーを避けてもつと早い時間に登校しているのだが、連休ボケしていたのか起床が普段より遅くなってしまい、結果がこの有様だった。

車内は様々な制服の高校生、私服の大学生であふれ返っている。少ないながらも社会人もいることだろう。

まさかキャロルに起こされるとは思わなかったな。

可純を遅刻の窮地から救ったのが、一日23時間は寝ていそうなトラ猫、キャロルだった。キャロルに体の上に乗られ、てしてし顔を叩かれて起こされたのだ。尤も、起きる直前に見た悪夢は、のしかかる巨体のせいだったのかもしれないが。それでも感謝しないといけないことは確かだ。

晩ごはんはちよつと奮発してやろうかな。

でも、あまり食べさせるとまた太って、羽純に怒られるかもしれない。キャロルの正統な飼い主は妹の羽純なのだ。

「むぎゅ」

電車が揺れ、また圧迫される。

しかし、まだ乗り換えただばかりで、ようやくひとつめの駅。学園都市はもうみつつほど先だ。

幸い次は比較的大きな駅で、降りる乗客も多い。降りるのが多け

れば乗るのも多いのだが、可純はその入れ替わりの隙にもっと楽しんでる位置を確保しようと目論んでいた。

やがて電車が駅に着いた。少ない数の乗客がホームに吐き出され、車内の人口密度がぐっと下がった。そのタイミングを狙って奥へと進む。

が、

「わっ、ぶ……」

しかし、人の流れの変化は思っていたよりも速く急激で、可純は新たに入ってきた乗客の波に押され、拳匂、人にぶつかってしまった。しかも、抱きつくようにして密着した構造だ。

「す、すいませんっ」

「あらあらあら、可純くんじゃないですかあ」

のんびりした声に己の名前を呼ばれ、顔を上げれば目線より少し上の高さに見知った顔があった。

「へーさん？」

「はい。へーさんです」

長い髪に、ぱっちりした目。ふんわりした雰囲気をもつ少女は、クラスメイトの入江英理依イリエ・エリイだった。彼女は今日も嬉しそうに、唄うように返事をする。

「朝から痴漢行為ですか。大胆ですねえ」

「ち、ちがうってば」

可純は慌てて英理依から離れた。が、混雑した電車の中ではあまり座標は変わらず、依然として至近距離。吐息がかかりそうなくらいに顔が近い。

「だいたい朝からって、昼でもそんなことしないよ」

「じゃあ、夜？ それはそれで特殊な趣味というか、楽しみ方というか……。やっぱりお相手は柚木さんでしょうか。それとも耀子さん？」

何やら照れて顔を赤くしながら、掌を頬に当てる英理依。聞いているこっちまで赤くなるわ。可純はその様子を見てげんなりした。

「それより、なんでへーさんが電車に？」

「もちろん学校に行くためですけど？」

「じゃなくて、へーさん、寮生でしょ？」

「はい」

因みに、女子寮B棟です　と英理依。

「そりゃそうだろうね。男子寮だったらびつくりだ」

「びつくりどころか、楽しそうですよね。周りは男の子ばかりですから」

　　またも赤面して頬を押さえる。今度は反対の頬と手。いったい彼女は頭の中で何を想像しているのだろうか。考えるだにおそろしい。

「いや、だから、寮生なら電車に乗らなくていいはずじゃない？」

「ああ、そういうことですか」

　　可純に言われて英理依が、ぱあっ、と顔を輝かせた。決して頭の回転が遅いわけではないのだが、時折おかしな方向に行くようだ。

「実はゴールデンウィークの後半、実家に帰ってたんです」

「あ、なるほどね」

　　つまり、今日は実家から直接の登校らしい。これだけのことを聞くのにはいふんと遠回りした気がする。可純はどつと疲れた。

「それにしても、すごい混みようです」

「うん。ボクもこれが嫌でいつもはもっと早いのに乗ってるんだけどね」

「ちゃんと降りれます？」

「『ら』が抜けてるよ。大丈夫じゃない？　学園都市でこっそり降りるはずだから」

　　そんなやり取りをしているうちにふた駅分の距離と時間は縮まり、車内に間もなく学園都市に到着する旨のアナウンスが流れた。乗客の意識が出口へと向く。可純も鞆を持ち直し、体をそちらへ向けた。と、そのとき、可純の手をやわらかい感触が包み込んだ。英理依の手だ。振り向き、彼女を見る。

「おいていかないでくださいね」

「ま、まあ、そんなに心配しなくても大丈夫だと思っけど」
思いがけず握られた手にどきまぎする。

程なくドアが開いた。途端、乗客がいつせいにそちらへと流れていく。

「あっ」

英理依の小さな悲鳴を聞いた気がするが、今さら止まることはできないし、止まること自体むりだ。

流れに乗って可純と英理依はホームの転がり出た。

「あー、つつかれたー……」

この感覚は登校初日以来だ。あのときも今日と同じような目に遭い、それをきっかけに早い時間の登校を決意したのだ。

不意に英理依が足を止め、遠慮がちに口を開いた。

「あのー、可純くん？ 実は鞆が中に……」

「はい？」

可純は彼女を見る。手ぶらだ。思い返せば中で立っているときから、手には何も持っていないかったように思う。続けて電車を見た。

一転してがらんとした車内。網棚の上には確かに翔星館高校の制鞆がひとつあるのが見えた。

「取ってくるっ」

言うなり可純は地を蹴った。

『間もなくドアが閉まります。危険ですので駆け込み乗車は』

アナウンスを聞きながら車両に飛び込む。中でも似たようなフレーズが流れていた。時間がない。手を伸ばして網棚から鞆を引きずり下ろした。そして、反転。再度駆け出す。

だが、

「……」

無情にもドアは可純の鼻の先をかすめるようにして閉まった。

揺れ、動き出す電車。

外を見れば、なぜか英理依が白いハンカチを振っていた。楽しそうだ。

「……思わず茫然自失する可純くんなのでス……」

つぶやく可純を乗せ、電車は加速していく。

「って、そんなこと言ってる場合じゃなくてっ」

可純は携帯電話を取り出した。

「入江、入江……。あれ、ない？ ああ、八行か」

多少手間取りながらもメモリイから英理依の名前を見つけた。電話をかける。すぐに彼女ののんびりした声が返ってきた。

『あらあらあら、今別れたばかりなのに、何か用ですか？』

「別れたくて別れたんじゃないっ」

「がー、と可純は口から火を吹いた。

「とりあえず、へーさん先に行つてて。ボクは次の駅で折り返すから。朝のホームルームはむりかもだけど、一時間目には間に合うと思う」

『あ、急がなくても大丈夫ですよ。わたしの勉強道具は寮の部屋にありますから』

「……」

「じゃあ、この鞆は何のために持つてて、何が入ってるの？ 軽い。

「が、何も入っていないわけではないようだ。

「いちおうボクも遅刻はしたくないからね。急いでいくことにするよ。……うん。じゃあ、教室で」

可純は通話を切った。

脱力して倒れるようにシートに腰を下ろす。

周りを見ればさつきまでの混雑ぶりはどこへやら、嘘のように空いていた。いつも乗っている早い時間でも、ここまでではない。

まだ朝なのに。

慌ただし過ぎる一日のはじまりに、可純の口からため息がもれた。

いつもは待つだけのホームに、反対側からきて降り立つというの
は、なかなか新鮮な感覚だった。

一度は通り過ぎた学園都市に戻ってきてみれば、一気に制服の学

生の姿は疎らになっていた。きつと朝のホームルームに間に合う電車は、可純が乗っていたのが最後だったのだろう。つまり、遅刻確定。一時間目にはまだ間に合いそうなのが不幸中の幸いか。

せめて傷口は浅く　そう思って走り出そうとした矢先だった。

「よっ」

肩を叩かれた。

振り返る。そこにいたのは翔星館の制服を着た女の子。ただし、上着はブレザーではなく白いベストで、足は黒いストッキングに包まれていた。人懐っこい笑みを浮かべるその顔は中性的で、少年のようにも見える。ショートヘアの丸顔に、可純はどことなく猫っぽい印象を受けた。

誰だろうと思ったのは一瞬。

「あっ」

すぐに思い出した。

「入試のときのっ」

「うん。久しぶり」

その少女は嬉しそうに、いつそう笑顔を見せる。

可純が彼女と出会ったのは、翔星館高校の入学試験のとき。と言っても、受験者同士としてではなく、彼女は試験会場で案内役をしていた。上級生なのだ。

その日、今日みたいにぎりぎりに会場入りした可純が、慌てるあまり受験票を持って右往左往しているところをいろいろと助けてくれたのが彼女だった。

「あのときはありがとございました」

「ま、あれが仕事だからね」

きつと案内役や試験監督の手伝いに有志を募ったのだろう。もしくは、むりやり駆り出されたか。

ふたりは止めていた足を踏み出し、歩き出した。

「君が合格したのは知ってて、一度顔を見にいこうとは思ってたんだけどね。なかなか行けないまま、気がついたら5月になってた」

「受験生の誰が合格したとか、そういうのってわかるものなんですか？」

「普通はわからないよ」

と、彼女はあっさりと言う。

「でも、君は特別。君みたいな子が入ったってことは、みんな知ってることだよ。……ま、あたしの場合は、それとは別のコネクションがあるけどね」

「なんか衝撃の事実を聞いてる気が……？」

「君は自分で思っているよりも有名だってことを自覚したほうがいいね」

彼女は苦笑する。

そんなものだろうか。確かに少々目立つとは思うけど、そこまで言われるほどではない気がする。尤も、それこそが自覚のなさなのだろうか。

ふたりはキャンパスガーターを抜ける。

当然のことながら、ショッピングモール周辺の店舗は、どれもまだ閉まっている。登校時はいつもこうだが、今日は同じ方向に向かう制服の姿がほとんどないのが普段と違う点だ。

「因みに、ボクってどんなふうにも有名なんですか？」

「それはまだ内緒。いずれわかるよ。伝統的に中間テストが終わったころに解禁になるらしいし」

彼女はいたずらをしかけた少年のように笑う。可純はちょっとだけ頬をふくらませた。

「まあ、なににせよ、会えて嬉しいよ。たまにはこんな時間に登校してみるのもいいね」

「あ、そうだ。遅刻だったんだ！ そんな暢気なこと言っていていいんですか！？ 走らないとっ」

「いいよ。どうせ走ったって朝のホームルームには間に合わないんだから。一時間目までには入れるだろうし。ゆっくり行こう」

なんとも上級生らしい考え方と余裕だと思った。

キャンパスガーデンの敷地を出て、横断歩道を渡り　　タイル張りの広い歩道に行く。翔星館高校へは、後は真っ直ぐだ。距離にしてバス停ひとつ分。

「で、君はなんで鞆をふたつ持つてるんだい？　罰ゲーム？」

「……そんなところですよ」

荷物持ちを強いた英理依には悪気はないのだろうか。

問うた先輩のほうは、使い込まれたぺしゃんこの制鞆を脇に抱えるようにして持っているだけ。とても軽そうだ。

学校までの距離は、そんな話と、入学したばかりの新生生ではまだ知り得ない高校生活の話題を聞いているうちに到達してしまった。朝のホームルーム終了のチャイムを、ちょうど門のところで聞いた。翔星館高校は校門をくぐると、そのまま真っ直ぐ裏門まで一本の道が延びている。その敷地内を貫く道の、左手に校舎が、右手の一段下がったところにグラウンドが広がっている。昇降口は長く横たわる校舎の真ん中にあるため、門を入った後もしばらく歩くことになる。

「あ、あの、先輩」

昇降口で一旦別れた後、それぞれの下駄箱で上靴に履き替えてから、可純はもう一度彼女をつかまえた。

「どうしたの？」

「先輩の名前、聞きそびれちゃって……」

なにせ呼びかけるだけなら“先輩”ですんでしまふ。今さらの質問で少し恥ずかしかった。

「ああ、そうだったね。あたしは深町七瀬^{フカマチ・ナナセ}。2年7組だよ」

「ボクは」

「知ってる。梓沢可純でしょ？」

七瀬の発音が可純の言葉を遮った。今までの話の流れなら、知っ
ていて当然だ。

「じゃあね」

「あ、はい。失礼します」

去っていく七瀬を可純が見送る。

今の時間は、朝のホームルームと一時間目の間。移動教室でもない限り生徒は廊下に出ないので、昇降口付近は静かなものだった。教室のある方向から、控えめな喧騒が聞こえてくる程度だ。

と思ったら、

「可純」

「うわあ、びつくりした!？」

立ち並ぶ下駄箱の陰から現れたのは耀子だった。

「なんでここに居るのっ? いつからいたのっ?」

「エリイから可純が遅れるって聞いて、迎えにきてみたのよ」

いつからいたのかは言わなかった。

「瞳ちゃん、何か言ってた?」

瞳ちゃんとは、担任の浅井瞳先生のことだ。今年初めてクラスを受け持つという。24歳。通称、24の瞳。来年にはもう使えないニツクネームだ。

ふたりは教室に向かって、どちらからともなく歩き出した。

「別に何も。一時間目までにはくるって言うておいたから、遅刻はついてないはずよ」

「まさか脅したんじゃないよね?」

普通、出欠の判断はホームルーム開始の時点でなされるのだが。

「……」

耀子は何も答えない。可純は隣を盗み見た。知らん顔だ。

「……」

脅したのかよ。

初めて受け持つクラスにこんなのがいて、瞳ちゃんもたいへんだなあ。可純は同情した。

「……あのさ、可純」

と、素っ気ない感じに、耀子。

「ん? なに?」

「……」

「いや、呼んできて黙るってさ」

「やっぱりいいわ」

「はい？」

思わず可純は耀子を見る。彼女の端正な横顔を見るのは、これで2回目。その表情には特に変わったところはない。

可純は首を傾げる。

耀子の様子がちょっとおかしい気がする連休明け第一日だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5679/>

サニーサイドアップにブラックペッパー

2010年11月29日12時06分発行